

言語文化学科

ドイツ語フランス語圏言語文化コース ドイツ語圏言語文化領域

19 世紀ドイツ生改革運動

—今日のドイツ語圏のヴェジタリアニズムに与える影響—

学部 文学部

卒業年度 平成 29 年度

学籍番号 A14LA123

ひらのりょうこ  
平野綾子

	はじめに .....	2
	第一章 ドイツ生改革運動とヴェジタリアニズム .....	3
5	第一節 19世紀ドイツ生改革運動について .....	3
	第二節 ヴェジタリアニズムの起源 .....	7
	第三節 生改革運動におけるヴェジタリアニズムの位置づけ .....	11
	第四節 ヴェジタリアン運動の立役者たち .....	14
10	第二章 生改革運動以降のヴェジタリアニズム .....	20
	第一節 第一次世界大戦期、第三帝国におけるヴェジタリアニズム .....	20
	第二節 1970年代のエコロジー運動 .....	24
	第三章 現代におけるヴェジタリアニズム .....	27
15	第一節 現在のヴェジタリアニズムの流行 .....	27
	第二節 ヴェジタリアンであることの目的 .....	29
	第三節 現代と19世紀末の思想比較 .....	32
	おわりに .....	37
20	図 1-4 .....	38
	表 ヴェジタリアン食を選ぶ理由 .....	40
25	注 .....	42
	参考文献 .....	47

## はじめに

本稿は 19 世紀ドイツ生改革運動が現在ドイツで流行するヴェジタリアニズムとの思想的な共通点を持った先例として機能していることを明らかにすることを目的としている。

5 日本に住む私たちにとってはドイツの食文化といえば、ヴルスト(ソーセージ)やアイスパイン(豚の脚肉の煮込み料理)といった肉料理の印象が強いかもしれない。しかし、ドイツ並びにイギリスやイタリアといったヨーロッパの国々は現在、国民の 10% 近くがヴェジタリアンであり、肉を食べない人々のための食料品や製品が広く流通しているのである。近年では日本においてもヴェジタリアニズムやヴィーガニズムといった  
10 言葉がメディアで取り上げられるようになったが、健康志向や環境保護の重要性が声高に叫ばれていることも相まって、世界的にこのような思想やライフスタイルが流行していると言える。

しかし、ヨーロッパの中でもドイツにおけるヴェジタリアニズムはそのような単純な流行によるものではなく、「生改革運動」という歴史によって裏付けられた思想の上  
15 成り立つものである。生改革運動とは 19 世紀末のドイツで展開された、「自然に帰れ」をキーワードとした近代化や都市化に反対する諸運動の総称である。生改革運動においては土地改革から女性解放運動に至るまで、多種多様な運動が行われた。その中でも、ヴェジタリアン運動は生改革運動の中核をなす運動として重要視されている。

20 現在日本においてドイツの生改革運動について分析した研究は存在するものの、ヴェジタリアニズム思想が通史的にどう変遷を辿ったのかという分析や、現在流行しているヴェジタリアニズムとの比較まで踏み込んだ研究はほとんど行われていない。<sup>1</sup>

そこで本稿ではヴェジタリアニズムがどのように生改革運動に現れ、その思想が生改革運動以降どのような形でドイツの文化史に登場してきたのかを時代ごとに見て  
25 いく。その上で、現在のドイツと当時のドイツの状況との比較を通じて、現在のヴェジタリアニズムに生改革運動の思想が少なからぬ影響を与えているということを明らかにしていきたい。

## 第一章 ドイツ生改革運動とヴェジタリアニズム

本章ではまずは 19 世紀に起こった生改革運動がどのようなものを理解するために、生改革運動がどのような経緯で発生したものであるのか、またヴェジタリアニズムがその中でどのように扱われていたのか、そして当時のヴェジタリアン運動に関わっていた人物の来歴を各節で順を追って見ていく。

### 第一節 19 世紀ドイツ生改革運動について

「生改革運動」(die Lebensreformbewegung)とは 19 世紀末から第一次世界大戦にかけてドイツで盛んに行われた社会改革運動の総称である。

10 Lebensreformbewegung という言葉は「生活改良運動」や「生活改革運動」と訳されていることが多い。竹中はこの語を「生改革運動」と訳しており、この点について「生の哲学などと共通する全体論的な発想に立っていたものなので、『生活』ではなく『生』の改革という名称のほうが適当である。」と主張している。<sup>2</sup> 生の哲学とは、19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて主にドイツ、フランス、スペインで発生した思想であり、「人間の精神的な生から哲学的に思索する根本の態度」である。<sup>3</sup> デル  
15 タイによれば、「現代は、個人と人類にとって行為の究極的な目標がどこにあるのかと問うことによって、自らを貫いている深い矛盾を露呈する」という。彼はこのような問いが発生した理由を 3 つ挙げている。すなわち、「実証科学が、それ以前の世紀の宗教的信仰と哲学的確信の基礎となっている種々の前提を、ますます解体し続けていること」、「前世紀における哲学の最高の業績である意識と認識の分析が、この  
20 上もなく効果的に、この粉碎の作業に協力してきたこと」、そして「歴史的比較によって、あらゆる歴史的確信の相対性が示されたこと」である。<sup>4</sup> このような理由により、生の哲学が文明化を懐疑的にとらえ、自然への回帰を要求する生改革運動の思想の一部となっていることは明らかである。

25 また、田村は生改革運動の説明の中で「ここでいう『生』とは、単なる生命や生活を指すのではなく、分割し得ない総体としての人間と、人間と宇宙との関係までを含む。」と述べており、生改革における生命観と、全体論や生氣論との共通性も指摘している。<sup>5</sup> 全体論は生の哲学にも関わるもので、全体は単に部分の集合体ではなく、独立した一個体としてみなすべきであるという考え方である。生の哲学において、  
30 人間の本质とは理性や知性、意志などが密接に結びついたもので、その人間を取り巻く文化、歴史、社会に影響を受ける。<sup>6</sup> そして、人間はこのような要素一つ一つの単なる集合体ではなく、それらが統合した独立的な存在である。

生改革主義者たちは、自然と人間はそもそも一体であり、自然に背いた生活を送ることで心身に不調をもたらすことになると考えていた。よって本稿では竹中の主張に基づいて「生改革運動」という訳を充てている。

5 まずは19世紀末の時代背景から見ていきたい。1871年のドイツ統一を経て、国内は今後の発展に沸き立っていた。様々な技術革新や制度の導入、機械化などによって、人々の中で競争が激化していった。メディアや交通機関が発達し、ヒトやモノの移動がより活発に、高速に行われるようになった。物質主義的な時代において、労働者たちの中には時間とノルマに追われストレスによって体調を崩す者も現れた。1880年代以降、神経衰弱という病名が使われ始めた。神経衰弱の症状自体はこの時代から現れたものではなく、人間の歴史において古くから存在していた。ここでその症状に名前が付いたのは、世紀末における人々が近代化による環境的な変化、生活の変化によるストレスによって心身に異常をきたすということに気づいたためである。ここで、こうした時代の変化を批判したり、あえて伝統的な方法を用いることで近代文明に背を向ける者が現れた。そして、文化そのものの衰退を危ぶむ者も現れ、この頃から「文化」と「文明」が相対する概念であるとして用いられるようになった。<sup>7</sup>

10 これには新カント派の登場によるところが大きい。新カント派の哲学によれば、「文化」とは物質的なものではなく精神的な価値を問題としており、「文明」は物質的な価値を追求するものである。そのため、「精神文化」と「物質文明」という対立が生まれたのだ。<sup>8</sup>

20 世紀転換期においては「文化」という言葉自体が流行し、「文化雑誌」といったものが出版され、「文化科学」が盛んになった。この頃人々が文化に注目し始めたのは、文明によって文化が衰退していると人々が考えていたからである。例えば哲学者オイケンが社会の現状を「文化頹落」と述べている。また彼は、非宗教的、世俗的なものに生が埋没していることにより、人々が精神的危機の中にあると指摘した。<sup>9</sup> この時代においては新たな時代の幕開けに対する楽観的な雰囲気と、急速な変化によるアイデンティティの喪失の懸念という悲観的な雰囲気とが混在していたのだと主張する論者は多い。生改革運動はこうした状況の中で近代の産業化、都市化に対する反発から生まれた運動である。<sup>10</sup>

25

30 しかしながら、生改革運動は単に「反近代主義」「前近代主義」と位置付けられるべきではない。例えば電気は自然療法にも取り入れられており、日光浴の代わりに電光を浴びる装置が開発されていた。竹中によれば、「自然療法は近代医学に対して厳とした対立姿勢をとっていた。しかしその一方では、思いがけないほど素朴な

進歩信仰を抱いていた」という。<sup>11</sup> これは、生改革運動の思想が「自然への回帰」という単純なものであるがゆえに、支持者たちの「理想の生」の像にばらつきがあったためだと考えられる。実際にスイスの共同体のアスコナでは、生活の快適さのために文明の利器を取り入れるか否かの対立が起こっていた。上山はこのように述べている。

自然に還れというスローガンの下に集まったコロニーの人びとにとって、「自然に還れ」が原始への回帰なのか、自然的なものへの回帰なのかという選択肢がそこにある。それは進歩観にも連動して来る。<sup>12</sup>

10

生改革運動において最も重要視されたのは自然であり、これは 18 世紀フランスの哲学者ルソーによる「自然に帰れ」という主張に影響を受けたものである。生改革運動においては自然が最も価値が高く崇拝すべきものであった。社会や個人のあらゆる問題が自然との一体化によって解決されると考えられていた。また文明によって失われた自然にユートピアへの憧れを抱いていた。「『失われた楽園』を現代の混沌に対置するという発想は、必然的に『楽園→墮落→救済』という歴史観に傾く」と竹中が述べているように、自然との一体化という理想は生改革主義者にとっては救済であったのだ。<sup>13</sup> 彼らにとって自然は真理であり、神であった。その意味で、この運動は宗教的な要素を含んでいた。この運動は自然に即した生き方を通して個々人の人間としての価値を高めるものであったが、その最終的な目的は近代化によって墮落した社会の改革であった。竹中によれば、生改革運動が盛り上がった動機は二つあるという。

15

20

25

30

つまり、都市における生活環境は、人口過剰、住宅の劣悪さ、大気汚染など、著しく悪化している。それが、人々の肉体的衰弱を生み、さらには道徳的腐敗をもたらしているというのである。こうした悪弊こそが、すなわち社会問題の根源であり、それに対処するには、健全な自然への回帰を進めるしかないというのが、生活改良の考えであった。さらに第二の動機としては、近代化に伴う社会の全般的な科学化・合理化傾向への反発があった。都市の大衆社会の中で、人々は原子化され、匿名化される。そうして個人の生が社会機構の歯車の中に埋没してしまうことに、彼らは深刻な実存的な危機を感じたのである。<sup>14</sup>

このような動機は初期ロマン主義時代から存在していた。自然は畏敬の対象から克服すべき対象に変わり、それに伴い人々の生活のあり方も変化した。バイザーによれば、人々は集団に帰属する意識を失い、批判主義へ陥ったことが共同体の破壊に繋がったのだと主張している。<sup>15</sup> ノヴァーリスやフリードリヒ・シュレーゲル、シュライエルマッハーらもまた文明が文化の衰退の原因となっていると批判し、近代の技術進歩による人間の機械化を指摘している。<sup>16</sup> ノヴァーリスは『キリスト教世界またはヨーロッパ』*Christenheit oder Europa*(1799)の中で、以下のように言及している。

人間の共同社会がかなりの長期間存続すると、それは自己の種族へのさまざまな愛情や信仰を減少させ、その努力の全てを生活の満足を得る手段にのみ振り向けることに慣れてしまう。彼らの満足への要求や技術はさらに錯雑したものとなり、所有欲を持つ人間は、それらの要求や技術に精通しそれらの熟練を身につけるのに多大の時を要するから、心情の静かな集中や内的世界の注意深い観察のための時間が残らなくなってしまう。<sup>17</sup>

また、シュレーゲルにおいても『ルツインデ』*Lucinde*(1799)の「安逸の牧歌」の章で近代社会における労働のあり方を批判している。「勤勉と有用とは、人間が天国へ帰参することを防げる、炎の剣もいかめしい死神にほかならないからである。」<sup>18</sup> といった部分や「プロメテウスは、彼が人間たちを労働へと誘惑した張本人であるからには、彼自身、のぞもうとのぞむまいと、どうしたって働かなければならない。彼は、もう十分、退屈しているだろうが、決して鎖から自由の身になることはないだろう。」<sup>19</sup> という部分から、近代社会の労働が自由と対極に位置するネガティブなものであると彼が考えていたことがわかる。

もっともこの時代の文明批判における重点のもう一つは生活環境ではなく、物質主義や功利主義に対するものであった。これはロマン主義者たちによる文化の衰退を懸念する視点と、生改革主義者たちが道徳的、もしくは宗教的に魂の汚染を懸念する視点という違いによるものと言える。しかしいずれにせよこうした文明に対する危機感が19世紀にかけて高まり、生改革運動という形で現れたのだと考えられる。

こうした生改革運動の担い手であったのは旧中間層やプチブルジョワジー、また教養階層であった。たとえば、1902年設立の作家、芸術家の協会であるデューラー同盟におけるメンバーの実に九割以上は教養階層であった。教養階層がこうした運動に反応したことについて、竹中は3つの要因を挙げている。一つ目はこの時代

に学生数が飛躍的に増加したことで多様化が進み、教養階層の集団的まとまりが損なわれたということである。次に、学生数が増えることで教養階層の労働市場の飽和を引き起こし、就職難が深刻化したことである。最後に、工業の発展により、「教養」よりも「実学」が重要視されたことを挙げている。こうした要因によって教養階層は

5 アイデンティティに危機感を抱き、生改革運動に反応したのだと推測している。<sup>20</sup>

一口に「生改革運動」というが、その活動領域は「自然への回帰」というキーワードを中心にして、同心円状に非常に幅広く展開していたと見られている。まず、最も内側に存在する運動がヴェジタリアニズム、裸体主義、自然療法などである。その外側には集落運動、田園都市運動、芸術における表現主義やユーゲントシュティールなどがあり、最も外側には平和運動、女性解放運動、占星術やオカルト的宗教運動までもが存在している。この中でも生改革運動の中心となった運動は自然療法とヴェジタリアニズムであるといわれている。<sup>21</sup> これらの運動の思想は「生改革運動」が登場する以前から存在しており、特に自然に密接し身体に多大な影響を与えることから生改革運動の中核を担っていた。<sup>22</sup> 「エデン」<sup>23</sup> など、ドイツ語圏の各地に多くの生改革運動のコロニー(共同体)が作られ、ここに住まう人々はこうした運動を実践していた。またフランツ・カフカやリヒャルト・ヴァーグナーのように、この運動に賛同し、実際にコロニーを訪れたり、このような生き方を実践していた著名人も存在する。

10

15

以上のように、生改革運動においては主に旧中間層の人々が「自然に帰れ」のスローガンに基づき、それぞれの運動によって自然に即した生活を実践していた。しかし、それは単に騒々しい文明社会からの逃避ではなく、自然との一体化をはかることで身体的、精神的そして宗教的な充実をはかるためのアプローチであった。次節では、生改革運動の中でも特に身体や生活、倫理観と関わりの強いヴェジタリアニズムに注目していく。

20

25

## 第二節 ヴェジタリアニズムの起源

前節では生改革運動がどのような経緯で発生したものなのかを見てきた。その中で、ヴェジタリアニズムが生改革運動の中心に位置していたことを示した。なぜヴェジタリアン運動が生改革運動の中心となっていたのかをさらに理解するため、本節ではヴェジタリアニズムの概念、起源について説明しておきたい。まずはヴェジタリアニズムないしはヴェジタリアンという言葉について説明する。実は「ヴェジタリアニズム」という言葉が一般的に使われるようになったのは比較的最近になってのことであり、

30



諸説あるが 1850 年ごろにその言葉が使われ始めたという説が支配的である。また、「ヴェジタリアニズム」という言葉はラテン語の *vegetare* (活気づける) や *vegetus* (生き生きした、活気づいた) という語が由来となっていると見られている。*vegetable* もまたこれらのラテン語に由来する言葉である。しかし、*vegetarianism* という単語は

5 *vegetable* に由来しているわけではない。<sup>24</sup>

南はこの点についてこう言及している。

ヴェジタリアンの人びとは、だいたい「自然のものを食べなさい」と主張し、その「自然のもの」というのは、肉食を避けて、できるだけ野菜を食べるという方向に

10 行きますので、日本語では「菜食主義」と訳されることが多いと思います。<sup>25</sup>

すなわち日本語における「菜食主義」という訳は厳密には不適切であり、本稿ではこの点を踏まえて「ヴェジタリアニズム」と表記するものとする。

次にその起源を見ていくが、肉食を禁ずる文化が初めて人類史の中に登場したのは紀元前 6 世紀のギリシャである。神話的人物であるオルフェウスを開祖とするオルフェウス教では魂の救済を目的として日常生活の中で禁欲や節制を実践しており、肉を禁じる戒律もその中の一つとして存在した。またその信徒たちは肉のみならず生物を利用すること自体を禁じられており、卵や牛乳、羊毛の消費や使用も許されていなかった。このオルフェウス教は後の西欧の思想に少なからぬ影響を与えた。

20 ライツマンは次のように述べている。

完全で恒常的な節制を通して、オルフェウス教はギリシャの宗教理解に新しい推進力を授けた。というのも特定の食べ物の消費の忌避は当時の一般的な祭式の食料規制と比較して、何か完全に新種のもを表していたからだ。[筆者訳]

25

Durch die völlige und andauernde Enthaltbarkeit verliehen die Orphiker dem griechischen Religionsverständnis neue Impulse, denn das Meiden des Verzehrs bestimmter Nahrungsmittel stellte im Vergleich mit den damals üblichen kultischen Speiseverboten

30

etwas völlig Neuartiges dar.<sup>26</sup>

さらにこの肉食の忌避を広めたのがピュタゴラスである。彼が魂を持つ者の肉の利用を禁じる掟を出したため、ピュタゴラス学派は儀式の際に神への供物として動物の代わりにお香や蜂の巣、パンが捧げられた。<sup>27</sup>

5 古代においては彼の他にプルタルコスやポルフィリオスも肉食を卑劣な行為であるとして批判していた。また、ヒポクラテスを筆頭に、医師たちの中にも肉の摂取による問題点を指摘する者もいた。彼が患者に処方した食物は現在のヴェジタリアン食に近いものであった。宗教儀式の際に捧げられたり、戦いの前に神話的な力をつけるという目的のための肉の利用が避けられていたのはこの時代の習慣となっていたが、自由意志による肉食の忌避はこの時代においても少数派であった。<sup>28</sup>

10 ローマ帝国においても、セネカは食事における節制を重視し、オウィディウスは肉食による人間と動物の調和の破壊を批判していた。『医学論』で知られるパラケルススはその中で自然療法的な治療についても言及した。

15 ローマ帝国以降も宗教倫理的な肉食の忌避はカルメル会やアウグスティノ隠修士会といったキリスト教の修道院同胞団によって伝えられた。しかし、その後 16 世紀に至るまで、こうした肉食の忌避について言及されている資料はほとんど見つからない。

その後の肉食の忌避に関わった重要な人物の存在については研究者によって意見が異なっている。例えばライツマンはこう述べている。

20 古代から工業化の始まりまでの何世紀もの間には、思想家や哲学者、そして他のヴェジタリアン的な生き方を支持する著名な人格者はほとんど伝えられなかった。そのうちの 1 人はレオナルド・ダ・ヴィンチ（画家、発明家。イタリア、1452-1519）である。[筆者訳]

25 Während der vielen Jahrhunderte zwischen der Antike und dem Beginn der Industrialisierung sind nur wenige Denker, Philosophen und andere prominente Persönlichkeiten überliefert, die sich zu einer vegetarischen Lebensweise bekannten. Einer von ihnen war Leonardo da Vinci (Maler und Erfinder Italien, 1452-1519).<sup>29</sup>

30 一方トイテベルクは 16 世紀以降のヴェジタリアニズムについても詳細に記している。トイテベルクによれば、16 世紀にはルネサンスと人文主義が注目されるようになり、人々は再び人間の環境や自然への関心を持った。モンテーニュは『エッセー』におい

てローマの作家、特にセネカの正しい生き方についての思想に言及し、自然に対して特別な評価を示した。16世紀の医師は自然や人間の治癒能力に着目し、その際に古代の栄養学も注目された。その際フランスやイングランドの聖職者がこうした食事法についての道徳的な評価を述べている。

- 5 トイテベルクによれば、このような人物による活動が工業化の時代におけるヴェジタリアン思想に対する支持に繋がっているという。

著者たちは18世紀の半ばまですでに議論の一部を発達させていた。それによって、後にヴェジタリアン運動が行われることとなったのである。[筆者訳]

- 10 Die Autoren hatten bis zur Mitte des 18. Jahrhunderts bereits einen Teil der Argumente ausgebildet, mit denen später auch die vegetarische Bewegung operieren sollte.<sup>30</sup>

- 15 工業化の時代以降のドイツにおけるヴェジタリアニズムの動きについては後の章で詳しく追うこととする。

- 最後にヴェジタリアニズムの分類について見ておきたい。一口にヴェジタリアニズムと言っても、実践されている食事方法は様々であり、分類は多岐にわたる。最も一般的で数が多いのが「ラクト・オヴォ・ヴェジタリアン」(Lacto-Ovo Vegetarian)と呼ばれる人々である。彼らは肉、魚のみを避ける食事法を実践している。「ラクト・ヴェジタリアン」(Lacto Vegetarian)は肉、魚に加えて卵を避けているものの、牛乳や乳製品は摂取することができる。一方「オヴォ・ヴェジタリアン」(Ovo Vegetarian)は比較的稀な食事形態で、ラクト・ヴェジタリアンとは逆に肉、魚、乳製品を避け、卵を摂取する。植物性食品のみを食べ、日常生活においても動物が関わる製品の利用を拒絶する人々は「ヴィーガン」(Vegan)と呼ばれる。彼らはしばしば「厳格なヴェジタリアン」と言い表される。ヴィーガンの中でも、調理していない生の製品のみを摂取する「ローケストラー」(Rohköstler)と呼ばれる人々がいる。しかし、一部のローケストラーは生の肉や魚、あるいは昆虫を食するため、このような人々はヴェジタリアンとして数えられることはない。<sup>31</sup> 摂取することができるものによってその分類はさらに細くなる。ここでは一部の代表的なものを紹介した。

- 30 以上のように、ヴェジタリアニズムとは古来より哲学や宗教と密接に結びついたものであり、歴史上の著名人によって身体面、精神面の効能が語られてきた。このよう

に、ヨーロッパにおけるヴェジタリアニズム思想の歴史が存在していたために、生改革運動においても重要な思想の一つとして認識されていたことがわかる。

### 第三節 生改革運動におけるヴェジタリアニズムの位置づけ

- 5 生改革運動において中心位置にあった思想運動の一つであるヴェジタリアニズムは同じく生改革運動の中核にあった自然療法運動と類似点が多く、比較されることもある。竹中によればそれは「発祥がザクセン地方であること、そこから徐々に拡大して、一九世紀末に全国レベルの組織形成にいたること」などがあるという。<sup>32</sup> 他にも、
- 10 協会の構成メンバーの社会階層においても両運動ともに「中間階層を中心とし、そしておそらく、そのうち幹部層は知識人が占める」という点、活発に活動していた地域的な特徴が双方とも都市に偏っており、「圧倒的に北中部のプロテスタント地域であった」という点も指摘している。<sup>33</sup> これは、ドイツにおけるヴェジタリアン運動の提唱者の一人であるバルツァーがプロテスタントの聖職者であり、彼が後に指導した自由宗教団体がヴェジタリアンに転向したことが一因だと考えられる。
- 15 ヴェジタリアン運動が自然療法運動と異なっている点として、竹中は前者が全国的な組織化に成功しなかったことを挙げている。協会の会員数においても自然主義協会の会員は全国で十数万人という大規模なものであったが、<sup>34</sup> 一方でヴェジタリアン協会の会員数は最も多い時期でも 2500 人程度であった。<sup>35</sup> 生改革運動の後期に発展したヴァンダーフォーゲル運動の協会の数が約 15000 人であった<sup>36</sup>
- 20 ことと比べても、ヴェジタリアン運動は一見すれば生改革運動の中心にあるように思えない。実際、一般の大衆はエデンなどのコロニーでヴェジタリアン生活を送る支持者たちを変人扱いしており、世間や家族の目を気にして協会への参加に消極的な人々もいた。<sup>37</sup> しかし、ヴェジタリアン運動は組織としてではなく思想として成功したと言える。菜食や果食はヴェジタリアン協会に属さない生改革運動の多くの支持者たちによって実践されており、生改革の「不可欠な要素」として機能していたため
- 25 である。<sup>38</sup> ヴェジタリアン運動の目指すところは、他の多くの生改革運動の目標と同様に社会問題の解決であった。この「社会問題」とは、ここでは近代化に伴う諸々の弊害を意味しているが、大きく2つに分けることができる。一つは神経衰弱や肥満、糖尿病といった文字通りの「文明病」であり、もう一つは社会に蔓延する犯罪や浪費
- 30 といった道徳的な堕落によるものである。ヴェジタリアンをはじめとした生改革主義者たちは、こうした個人による実践が達成されて初めて社会の改革に役立つものになると考えていた。<sup>39</sup>

ヴェジタリアン運動が組織的に成功しなかったことに起因して、支持者たちの中には自らがエリート的な存在であると自負している者がいた。竹中はこのように分析している。

- 5 真理の徒はいつの時代にもつねに少数であり、そして少数であるがゆえに世間から迫害されるのだと、彼らは考える。しかし、まさしくそのために彼らの選良意識はかえって強まり、また運動全体としてはセクト的性格が色濃くなったのである。

40

- 10 この指摘によれば、ヴェジタリアニズムの支持者たちは確かに数として多くはなかったものの、それを負い目としては感じておらず、むしろ自身のステータスであるとして受け入れていたような印象を受ける。

さらにバーレジウスは「食事の変革を主としていた自然療法施設でも肉は食べられていた」とみられる兆候から、協会は「生改革運動の知的、制度的な注目の重要性を主軸において」おり、それをエリートステータスとして捉えていたと主張している。

15

41

一方でフリッツェンによれば、そう考えていたのは必ずしも協会の全員ではなかったようだ。

- 20 多くのイベント、すなわちそれは大抵健康的な生活を啓発するための俗学的な講義であるが、それらは公衆のためで、定期的に協会メンバー以外の人々によって訪れられた。「ドイツヴェジタリアン同盟」の地方協会もまた公衆向けのイベントを準備した。市立の建物で何日も「特別なリクエスト」にまで応えた展示を行ったり、他の街まで出張したりした。[筆者訳]

- 25 Viele Veranstaltungen, meist populärwissenschaftliche Vorträge zur gesundheitlichen Aufklärung oder Koch- und Ernährungskurse, waren öffentlich und wurden regelmäßig auch von Nicht-Mitgliedern besucht. Auch die Ortsvereine des „Deutschen Vegetarier-Bundes“ organisierten öffentliche Veranstaltungen, etwa  
30 mehrtägige Ausstellungen in städtischen Gebäuden, die dann „auf besonderen Wunsch“ noch verlängert wurden und in andere Städte wanderten.<sup>42</sup>

このように、ヴェジタリアニズムの支持者たちの中には閉じられた環境の中で活動していた支持者たちのみではなく、世間に向けた広報活動やイベントを行っていた者たちもいた。またフリッツェンはヴェジタリアニズムの支持者たちは他の同年代の生

5 改革グループに比べてエリート意識が高いわけではなかったことを指摘しており、<sup>43</sup> エリート意識はヴェジタリアン協会やその支持者にとどまらず、生改革団体の支持者たちによく見られる性格であったと考えられる。

バーレジウスによれば、生改革運動におけるヴェジタリアン運動は当初、宗教的な色合いが非常に強かった。特に、バルツァーがその発端となったことを以下のように

10 指摘している。

宗教、宗派にとらわれない団体の創設者である彼は彼の失敗の後になって初めてヴェジタリアニズムに転身した。彼はヴェジタリアンの生活に宗教にとらわれない理念を反映させ、その結果それを宗教的なものにした。[筆者訳]

15 Er, der Gründer der freireligiösen Gemeinden, wandte sich erst nach deren Scheitern dem Vegetarismus zu. Er projizierte die freireligiösen Ideen auf die vegetarische Lebensweise und machte sie damit zu einer religiösen.<sup>44</sup>

20 またバルツァーだけにとどまらず、ヴェジタリアンに関する著作のタイトルによってもそうした宗教性が読み取れる。例えばツィンマーマンの著作『楽園への道』*Der Weg zum Paradies. Eine Beleuchtung der Hauptursachen des physisch-moralischen Verfalls der Culturvölker, so wie naturgemäße Vorschläge, diesen Verfall zu sühnen.* (1843) やシュトゥルーフエの『菜食—新たな世界

25 観の基礎』*Pflanzenkost, die Grundlage einer neuen Weltanschauung.* (1869) が挙げられる。またシュトゥルーフエの小説『マンダラの彷徨』*Mandaras Wanderungen* (1845) の主人公は僧である。<sup>45</sup>

そしてこれらの提唱者たちの活動から読み取れることは、提唱者たちがキリスト教に対する反発心や不満を抱えており、代替となる宗教を模索していたことである。彼

30 らは社会問題を解決する方法として社会制度や法による圧力を民衆にかけることに否定的であり、倫理的な信仰を伴うものでなくてはならないと考えていた。<sup>46</sup> ただし、バーレジウスはヴェジタリアン運動の支持者たちの年齢層が 20-35 歳に集中してい

ることから、ヴェジタリアニズムの理念が宗教的なニーズのみを満たしていたのではないと主張しており、<sup>47</sup> むしろヴェジタリアンが生改革の重要な要素となってからはヴェジタリアニズムの自主性を強調するため、宗教的な要素を隠すようになったという。<sup>48</sup>

5 生改革運動におけるヴェジタリアン運動の特徴は、以上のような点を踏まえ次のようにまとめられるだろう。ヴェジタリアン運動は生改革運動の思想の中心に位置する運動の一つであった。その目的は自然に即した生活の実践によって社会問題の解決を目指すものだった。ヴェジタリアン運動の提唱者たちはキリスト教に背を向け、その代替宗教となる拠り所を探していた。彼らは自然の中に倫理的な生き方の模範を見出すヴェジタリアニズムに着目し、同志を集めるために徐々にその宗教性を覆  
10 い隠すようになった。

#### 第四節 ヴェジタリアン運動の立役者たち

ここでは、運動の実態をさらに理解するために生改革運動におけるヴェジタリアン運動に関わった人々について取り上げたい。パーレジウスやジェフリーズはこの運動  
15 の提唱者として、彼らの活動のみならず、一般的な「提唱者」としての伝記的な資質を持つ以下の6人の人物の名を挙げた。エドゥアルト・バルツァー (Eduard Baltzer, 1814-87)、グスタフ・シュトゥルーフェ (Gustav Struve, 1805-70)、ロベルト・シュプリンガー (Robert Springer, 1816-85)、テオドール・ハーン (Theodor Hahn, 1824-83)、ヨハン・ヴィルヘルム・ツィンマーマン (Johann Wilhelm Zimmermann, 1819-82)、リヒャルト・ヴァーグナー (Wilhelm Richard Wagner, 1813-83)の6人  
20 である。<sup>49</sup> このうちの多くは1848年の革命に関与していた人物である。ジェフリーズはこうした人々がヴェジタリアン運動の提唱者となったことが、政治システムを通じた社会の改革の難しさの証明になっていると指摘している。<sup>50</sup> ここでは彼らの生涯や活動について紹介しておきたい。

25

##### エドゥアルト・バルツァー

バルツァーは1848年、ライプツィヒの北に位置するホーエンライナで生まれた。彼の父は牧師で、母もまた牧師館の生まれであった。彼はライプツィヒ大学やハレ大学で神学を学び、後に神学的合理主義に転身した。彼は数学や合理主義に傾倒し  
30 ていたこともあり、伝統的な宗教的教義に反発していた。彼は聖職者になることに迷いを抱いていたが、神学者になることを決めた。神学的な改革に従事したいと考えていたためだ。しかし彼の独特の信条によって、安定して牧師職や説教師として働くこ

とは困難を極めた。彼は各地の教会職を転々とした。そんな中彼は、自由宗教運動の指導者となる。<sup>51</sup> 自由宗教的なプロテスタンティズムに転身した彼の兄弟フリードリヒや従兄弟に影響を受けてのことであった。彼は 1842 年から自由宗教運動組織である「光の友」(Lichtfreunde)に加入した。彼は革命において、フランクフルト準備議会やプロイセン国民議会の議員を務め、弾圧の対象となった。1859 年に  
5 ゴータで「ドイツ自由宗教教区同盟」(Bund Freireligiöser Gemeinden Deutschlands)が創設された際、彼はその代表となり、1887 年に死去するまで運動に携わった。

彼がヴェジタリアニズムに出会ったのは 1866 年、テオドール・ハーンの思想を知ったときであり、バルツァーは 52 歳であった。彼がヴェジタリアニズムに傾倒した動機は  
10 明らかでないが、バーレジウスによれば、個人の生き方を通じた社会の変革を実行できるものがヴェジタリアニズムであり、彼にとってすでに魅力的ではなかったプロテスタンティズムや、失敗した自由宗教に代わるものであったという。<sup>52</sup> 1867 年、彼は「自然生活様式協会」(Verein für natürliche Lebensweise)を設立し、ドイツ  
15 初のヴェジタリアン思想をテーマとした雑誌『自然生活様式の友の協会誌』*Vereinsblatt für Freunde der natürlichen Lebensweise*を創刊した。彼の活動を支持する者は多く、自由宗教信徒達や生改革運動主義者達の共感を呼んだ。バルツァーの死後には「ドイツ菜食主義同盟」(Deutscher Vegetarierbund)がライプツィヒで結成された。<sup>53</sup>

20

### グスタフ・シュトゥルーフ

シュトゥルーフは 1805 年にミュンヘンで生まれた。彼の家系は代々ロシアの外交官を輩出する一家で、彼の父もまた国家評議員であった。シュトゥットガルトで育った彼はゲッティンゲン大学、ハイデルベルク大学で法学を学んだ。彼は家系によ  
25 って外交官としての将来を約束されており、オルデンブルク大公国に仕官した。しかし外交官としての仕事は彼の政治理念に一致していなかったため、この職を辞するに至った。その後ゲッティンゲン大学、イエーナ大学に教授資格申請論文を提出するも受理されず、家族のもとで経済援助を受けて生活する。1837 年に弁護士に任命された彼は急進性を強めていった。1845 年、後に革命家・女性解放運動家として活躍することになるアマーリエと結婚し、改革的な宗教運動を推進するドイツ・カトリックに改宗した。1848 年の革命の際、彼は自身の政治理念、すなわち連邦共和国を具現化する機会であるとみなし、積極的に参加した。バーデンの革命運動の指  
30



5 導者として台頭し、バルツァーと同様に準備議会の議員となった。しかし急進派リベラルのヘッカーとともに蜂起するも失敗し、彼はスイスへ亡命せざるを得なかった。その後、レーラッハにて蜂起を起こすも失敗し、再び亡命を繰り返して 1863 年までアメリカに住むこととなった。その後ドイツへ帰還が許されるも、彼の急進的な思想が原因で政界に復帰することは叶わなかった。

10 彼がヴェジタリアニズムに目覚めたのは 1832 年、シュトゥルーフエが 26 歳の時であった。そのきっかけとなったのはルソーが著した『エミール』のプルタルコスの引用を読んだことであると彼は述べている。<sup>54</sup> 彼は 36 年にシュトゥットガルト近隣の同志を集め、「シュトゥットガルト菜食主義団体」(Vegetarische Gesellschaft Stuttgart) を設立した。また、45 年にはヴェジタリアンを主人公とした『マンダラの彷徨』を執筆し、キリスト教社会の腐敗を批判した。ドイツにおいてこのようにヴェジタリアニズムの世界観を表現した小説作品はこれが最初であった。その後も彼はヴェジタリアニズムを貫いており、1868 年に「シュトゥットガルト菜食主義者協会」(Stuttgart Vegetarier-verein) を設立した。翌年に『菜食—新たな世界観の基礎』  
15 *Pflanzenkost. Die Grundlage einer neuen Weltanschauung* を執筆し、後のヴェジタリアンに多大な影響を与えた。<sup>55</sup>

### ロベルト・シュプリンガー

20 シュプリンガーが生まれたのは 1816 年、ベルリンだった。彼の父は宝石商で、シュプリンガーは教員学校へ通った。しかし作家を目指した彼は教師としての職を 1 年半で手放した。彼はパリやローマ、ライプツィヒ、ワイマールといった、古典芸術や文化の歴史的な街を旅した。1853 年、37 歳の時にシュプリンガーはベルリンへ帰ってきた。彼はいくつかの寄稿や評論を書き、様々なテーマで本を出版した。彼はゲーテやレッシング、シラーといった有名な作家や、ショーペンハウアーなどの流行りの哲学者を引き合いに出していたが、文学的にはあまり認められていなかった。経済的には常に不安定で、知人に金を無心することもしばしばあった。

30 彼は 1870 年代からヴェジタリアンになった。74 年にヴェジタリアン協会の会議で信仰告白を行なったものの、彼が完全にヴェジタリアニズムを実践していたかどうかは明らかではなく、むしろバーレジウスはこの点に関しては否定的に捉えている。彼は晩年の 11 年間にヴェジタリアニズムに関する書『ヴェジタリアン文学への道しるべ』  
*Wegweiser in die vegetarianische Literatur* (1873) を出版し、ヴェジタリアン雑誌に寄稿を行っていたが、彼はヴェジタリアニズムそのものよりもピュタゴラスの教

えに関心を持っていたようだ。バーレジウスは、「彼が作家として評価されるためにヴェジタリアニズムに接近したという可能性がある」と述べている。<sup>56</sup>

### テオドール・ハーン

5      ハーンは 1824 年 5 月 19 日に、メックレンブルクのルートヴィヒスルストで生まれた。彼の父は軍事裁判所の上級裁判官であった。彼はワクチン接種による発疹を患った経験があり、喘息を持っていたために常に健康を強く意識していた。彼は自身の健康状態の問題で医者になることはできなかつたため、16 歳の時に薬剤師を目指し職業訓練を受けた。彼は 1847 年に自然療法と出会った。当時有名な水療法士であった J. H. ラオセの著書を読み、ラオセの施設を訪れた際に水療法士に  
10  転身することを決めた。ハーンは総合的な医学の知識を十分には持っていなかったが、1849 年に水療法士として開業した。ハーンにとっては自然療法士を名乗るのに必要なのは知識そのものではなく生活改善の実践やそれに対する信条であった。彼は職業的地位を得ないまま、自身が設立した自然療法施設のあるザンクトガレンに  
15  1854 年に引っ越した。ハーンはこの施設を管理しつつ、1882 年、58 歳で直腸癌によってこの世を去るまでこの地にとどまった。

    彼はフーフェラントの著書『マクロビオティック』 *Makrobiotik oder Die Kunst das menschliche Leben zu verlängern* (1796) を読んだことがきっかけでヴェジタリアンに転身した。1882 年、彼の死の直前に書いた本である『病の歴史』  
20  *Krankheitsgeschichte* で彼はこの生活を始めた時のことを正確に物語っている。また、彼は 70 年代にヴェジタリアニズムと自然療法に関するいくつかの書を出版した。『自然に即した食事、未来の食事』 *Die Naturgemässe Diät, die Diät der Zukunft* (1870) や『ヒポクラテスの自然療法の教え』 *Die Naturheillehre des Hippokrates* (1871) などである。彼は西洋医学を嫌い、社会問題を宗教問題と  
25  結びつけ、ヴェジタリアニズムを「救済」とみなしていた。

### ヨハン・ヴィルヘルム・ツインマーマン

    ツインマーマンは 1819 年にイエーナのハイニヒェンで生まれた。彼の父は小作農で、戦争で財産を失いフライベルクの近くのグロースイエーナに移住した。彼の子供  
30  時代がどのようなものであったかは明らかでない。1834 年から彼は学生寮に入った。リアルシューレを卒業した後は、ヴァイセンフェルスの教員養成大学に通った。1840 年には彼の学生たちとイギリスへ旅立ち、リッチモンドにあるヴェジタリアンのための教

育施設に滞在した。イギリスから帰った後、プロイセンのハレへ戻り王立教員養成大学予備校やリアルシューレなどで教師として働いた。しかし彼の思想が原因で、政府は彼をライプツィヒへ強制移住させた。その後も教師として様々な職場を転々とし、いくつかの教育書を書いた。没年は明らかではないが、少なくとも協会誌の編集長とやり取りをしていた1871年から、没後に彼の本の第3版が出版されたとされる1884年の間の出来事である。

彼がヴェジタリアンとして生きることを決めたのは学生寮での経験からである。彼は蠅のたかった肉を食べることを拒否し、寮は罰として、4週間彼に肉料理を出さなかった。彼はその間に身体的な健康を感じ、精神的な仕事が捗ったという。1839年からは完全に肉を断ち、イギリスに滞在する中で『楽園への道』を執筆した。1843年に第1版が出版されたこの本はドイツ初のヴェジタリアンに関する書物として知られている。しかし政府のさらなる制裁を恐れた彼は、40代の終わり以降ヴェジタリアニズムと縁を切り、この本を絶版とした。彼自身はヴェジタリアニズムの提唱者として扱われることに否定的であったが、彼の死後に彼の意思に反して『楽園への道』が出版されたことで現在までそのように伝えられることとなった。

### リヒャルト・ヴァーグナー

ヴァーグナーは周知の通り、音楽家として大きな名声を得ており、現在でもその名は世界中に広く知られている。しかし彼はそれだけにとどまらず、動物愛好家であり、ヴェジタリアニズムを支持していた。音楽家としてのヴァーグナーの生涯についてはここでは省き、彼のヴェジタリアニズムへの関与に焦点を絞って見ていきたい。

上述の通り、彼は無類の動物好きであった。最初の妻と生活していた間はペットとして犬やオウムを飼い、その後もネズミや猫、孔雀や馬に至るまで、多くの動物と暮らしていた。彼の動物好きな性格はいくつかの作品にも表れており、『パルジファル』*Parsifal*(1882)においては動物愛護の要素が組み込まれている。第一幕において、白鳥を射たパルジファルがグンネマンツに殺生を咎められ弓を折り投げ捨てるというシーンがある。<sup>57</sup> 当時はこの作品が「ベジタリアニズムのプロパガンダ作品」と受け止められた。<sup>58</sup> また彼は『宗教と芸術』*Religion und Kunst*(1880)において、ヴェジタリアニズムの必要性を説いている。その中でヴァーグナーは人類が元々は植物性の食物をとっていたという説を支持しており、人種が混交したことに加えて人類が肉を食べ始めたことが人類を汚染したのだと言及した。<sup>59</sup> 例えば『宗教と芸術』第3章の中で、彼は以下のように述べている。

人間は自然に反した栄養摂取の結果、人間にしか見られない病気で衰え、天寿を全うすることもなければ穏やかな死を迎えることもなく、むしろ、人間のみが知る心身の苦患や苦難に苦しみながら虚しい生を送り、絶えず死の脅威に怯えながら悶々とした日々を送るのである。<sup>60</sup>

さらに彼は動物愛護のための協会、ヴェジタリアン協会、節酒協会の3つの団体が結束して国家社会から注目される存在となれば、現代文明によってエゴイズムに支配された現代人が真の宗教を取り戻すことができると述べている。<sup>61</sup>

10 ヴァーグナーはそれだけではなく人種差別、特にユダヤ人差別も行っており、これが後にヒトラーに影響を与えることとなる。同書の第2章の中で掟を遵守することによって他民族に対抗して結束を保つことができると信じていたユダヤ民族は「たちまちその報いで他のあらゆる民族の憎悪と軽蔑の対象になったし、独自の生産力を持たないままに人類全体の墮落に漬け込んで生存を保ってきた」と述べている。<sup>62</sup>

15 人類の頽廢が肉食によるものであり、その元凶となったのはユダヤ教であるというヴァーグナーの思想はショーペンハウアーにインスピレーションを受けたものである。彼もまた、人間は動物に同情すべきであると考え、現実にそのようになっていないのはユダヤ教が動物と人間の間線引きをしたせいであるとして批判していた。<sup>63</sup>『倫理学の二つの根本問題』*Die beiden Grundprobleme der Ethik* (1841)において、ショーペンハウアーはこのように主張している。

25 すなわち、ヨーロッパのふつうの道徳体系においては非常に無責任にないがしろにされている動物をも、この道徳的衝動は保護するのである。[中略]動物に対してはいかなる義務も存在しないという妄想は、まさに人を憤慨させる西洋の野卑野蛮であり、その源泉は、ユダヤ教にある。<sup>64</sup>

ヴァーグナーはショーペンハウアーのこのような思想を受け継ぎ、動物愛護と肉食主義の正当性を主張した。

30 副島や小原は興味深い事象としてこうした提唱者たちの多くが1848年の革命に様々な形で関わっていたという事実を挙げている。例えば小原は以下のように指摘する。

よく知られるように、ヴァーグナーは一八四九年のドレスデン蜂起に参加して九年間の亡命生活を経験しているし、シュトゥルーヴェはバーデンの革命運動の指導者であった。また、バルツァーはフランクフルトの準備議会議員などに選出されて議会の内外で活発に活動し、ハーンは革命期には共産主義者同盟やドイツ労働者友愛協会の、六〇年代には第一インターナショナルのメンバーであった。さらにツィンマーマンも、思想信条が理由で革命前にプロイセンからライプツィヒへの移住を余儀なくされたのである。<sup>65</sup>

勿論革命に関わっていたことのみが彼らをヴェジタリアニズムへの転身に導いたのではないが、政治システムを通じた社会の変革の難しさを経験した彼らは、違った形で社会問題を解決する手段としてヴェジタリアニズムという思想に行き着いた。この意味で、革命が彼らの思想をヴェジタリアニズムという形で表現するきっかけとなったと言えるだろう。

15

## 第二章 生改革運動以降のヴェジタリアニズム

本章では生改革運動が盛り上がりを見せた後のヴェジタリアニズムが運動としてどのように存在していたのか、またそれがどのように形を変えたのかについて確認していく。生改革運動以後から現代に至るまでのこの期間で、大規模なヴェジタリアン運動は起こっていない。本章ではその間にヴェジタリアニズムがどのような形で存在していたのかを明らかにしていく。

### 第一節 第一次世界大戦期、第三帝国におけるヴェジタリアニズム

生改革運動内部の運動として、ヴェジタリアン運動は18世紀末から19世紀初頭にかけて賑わいを見せていた。しかし、ヴェジタリアン協会の会員数は非常に不安定で、1877年に1500人ほどいた会員は翌年約100人にまで減少し、1884年には2500人ほどにまで回復するといった調子であった。そうした中で、1892年には競合していた二つの大きなヴェジタリアン協会がライプツィヒにて合併し、その後19世紀に入ると地方に点在していたヴェジタリアン協会の合併が繰り返されるようになった。1912年にはベルリンに7つあったヴェジタリアン協会が、合併を繰り返して2つにまで減少した。これは退会者数の増加が原因で、1913年にはドイツ全体のヴェジ

タリアン協会の入会者の数を退会者の数が上回った。政府によれば、この退会者数の増加は4つの要因が原因となっていた。

- 1、各協会同士の方針の不一致が継続的なものとなっていたこと
- 2、ゾロアスター教の一派であるマズダズナン教による運動との競争が起こったこと<sup>66</sup>
- 3、ヴァンダーフォーゲルやボーイスカウトといった新たな生改革団体が登場したこと
- 4、会費が他団体よりも比較的高かったこと

5  
10 こうした要因により、ヴェジタリアン協会の会員数は減少の一途を辿り、第一次世界大戦時には運動自体が危機的な状況にあった。実際には「ドイツヴェジタリアン同盟」(Vegetarier-Bund Deutschlands)などの大きな組織はナチス時代に入るまで存続していた。<sup>67</sup>

15 1934年には現存していたヴェジタリアン協会の多くがヒトラー政権によって「バルツァー同盟」(Baltzer-Bund)として「生改革のためのドイツ団体」(Deutsche Gesellschaft für Lebensreform)の中に統合された。1935年には統合されずに残っていた「ドイツヴェジタリアン同盟」(der Deutsche Vegetarier-Bund)がヒトラー政権によるこの統制を逃れるために遂に解散した。同同盟に他の団体も続き解散したため、ナチスの管理下にはない組織的なヴェジタリアニズムの活動はさしあたって休止したこととなる。<sup>68</sup>

20 しかし、アドルフ・ヒトラーは概ねヴェジタリアンであった。時にハムやレバークネーデルを食べることもあったが、彼は肉を「死体」と呼び、肉食を嫌悪していた。<sup>69</sup> ヒトラーがそのような生活を選んだ理由については明らかにされていない。ロバート・N・プロクターは「伝記作家の何人かは、国家主義者・禁欲家である作曲家リヒャルト・ワグナーの影響を指摘する」と述べる。<sup>70</sup> ヴァーグナーは人類が元々は植物性の食物をとっていたという説に賛同しており、人種が混交したことに加えて人類が肉を食べ始めたことが人類を汚染したのだと言及した。ヒトラーが実際に「私が肉に手をつけないのは、この件に関するヴァーグナーの発言によるところが大きい」と述べたことから、プロクターはヒトラーがヴァーグナーに共感を示していたと推測している。<sup>71</sup> もっとも、原始の人類が植物食の形態をとっていたという説は現在否定されており、当時  
25  
30 においてもケーニヒスベルク大学教授のパウル・アドロフが、ヴェジタリアニズムが自然食であるという説に反論していた。<sup>72</sup>

ナチス幹部の中ではさらにルドルフ・ヘスやヒムラーも熱心なヴェジタリアンであった。しかし幹部全員がヴェジタリアンだったわけではなく、少なくとも宣伝相のゲッベルスは肉を食べていたことがわかっている。彼らがヴェジタリアニズムを実践していた理由として、「ナチスの支配層は肉食を断つことをエリートとしてのステータス誇示に用いている」という説がある。<sup>73</sup>

5  
10  
第三帝国において、生改革運動内のヴェジタリアニズムに加えて新たな要素として『自然な生活』が強兵につながるという考え方が結びついたとプロクターは指摘している。<sup>74</sup> ナチスにとって健康は重要なテーマであった。強靱な肉体を持つ国民を求めたナチスは特に食事においても積極的な統制、プロパガンダを行なった。「身体は国家のもの！身体は総統のもの！健康は義務である！食事は自分だけのものではない！」というナチスのスローガンからもこのことは容易に見て取れる。<sup>75</sup>

15  
このような状況で、ナチスは肉を病気の原因になるため肉を食べすぎないようにと人々に呼びかけた。プロクターは「菜食民族にはガンが少ないようだという見解はリーク[Erwin Liek、外科医、プロイセン、1878-1935]によって支持され、ナチス時代にはしだいに主流の意見となっていく」と述べている。<sup>76</sup>

20  
彼らはヴェジタリアニズムを特別視していたものの、ヴェジタリアン運動を大々的に行うことはしなかった。ライツマンはこの点について「平和的で倫理的な信念は、国家社会主義と一致しなかった」と述べている。<sup>77</sup> また、「VEBU(ドイツヴェジタリアン同盟)」も第三帝国時代のヴェジタリアン同盟の活動について、同じく以下のような声明を述べている。

それらは平和主義を促進すると疑われていたため、否定的な報道や官僚の障壁と戦わなければならなかった。[筆者訳]

25  
Sie wurden verdächtigt, den Pazifismus zu fördern, weswegen sie mit negativer Berichterstattung und bürokratischen Hürden zu kämpfen hatten. <sup>78</sup>

30  
ただし、この主張には注意が必要な点がある。なぜなら生改革運動における他の運動の中には、ナチスの思想に近い主張を掲げたグループもあったためである。例えば田園都市運動の著名な活動家であるテオドール・フリッチュは反ユダヤ主義を掲げていた。また、裸体運動の中にはナチスの人種政策に近いものが実践されていた一派があった。<sup>79</sup> またナチスは完全にヴェジタリアニズムを排斥しようと考えていた

わけではないのである。1942年4月26日のゲッベルスの日記にはこの点に関してこのように書かれている。

5 もちろん彼[ヒトラー]は戦争の間に私たちが完全に食料体系を改革することはできないことを知っている。しかし彼は戦争が終わった後にこの問題に取り組むつもりである。[筆者訳]

Of course he knows that during the war we cannot completely upset our food system. After the war, however, he intends to tackle this problem also. <sup>80</sup>

10

ただでさえ食料の乏しい戦時中において、国民に対して貴重な肉を禁止するような真似が無謀であることは明らかである。そのためナチスの幹部たちはヴェジタリアニズムを大々的に宣伝するのは戦争後まで待つべきであると考えていたのだ。またゲッベルスは同年、「肉とバターを取りあげられたら誰も道理に耳を貸さなくなる」<sup>81</sup>と発言しており、ナチスドイツ時代にヴェジタリアニズム運動に動きがなかったのは戦時中の物資の不足が原因であったことが推測できる。

15

また、バーカスによれば、ヒトラーはヴェジタリアン運動の宣伝として利用されることを懸念しており、そのために運動の弾圧を行ったという。<sup>82</sup>

20

よって、ナチスは平和的な信条を掲げ、宗教的な要素を持っていたヴェジタリアン同盟と距離を置き、独自に食料改革を行おうと考えていたと考えるべきであろう。

25

そして、第二次世界大戦の後、1946年には新たに「ドイツヴェジタリアン連合」(Vegetarier-Union Deutschlands)が設立され、ヴェジタリアニズムの再組織化がはじまった。同協会は雑誌「ヴェジタリアン」*Der Vegetarier*を復活させ、ドイツヴェジタリアン評議会を創設した。また、次第に地元組織を傘下に入れ、ネットワークを構築していった。この協会は1973年に「生活復興のための同盟」(Bund für Lebenserneuerung)と名を変え、最終的に1986年には再び原点に立ち返り、「ドイツヴェジタリアン同盟」(Vegetarier-Bund Deutschlands)としてハノーファーに拠点を置いた。現在はベルリンに拠点を移しており、先述したVEBUがこれにあたる。<sup>83</sup>

30



## 第二節 1970年代のエコロジー運動

次に、1970年代にヨーロッパで起こったエコロジー運動について見ていきたい。この運動の中では直接的にヴェジタリアニズムが主張されておらず、一見すれば一連のヴェジタリアニズムの流れからは外れているように見えるかもしれない。しかし、環境保護的な思想という観点から見れば、生改革運動における自然賛美と重なっている。本節では1960年代に初めて本格的な環境政策を打ち出したヴィリー・ブランツによる政権に焦点を当て、政治的な関連と絡めて1970年代のエコロジー運動の動きを確認していく。

70年代のエコロジー運動は単発の運動としてではなく、生改革運動時代のヴェジタリアニズムから発展して発生した運動であるとしてみなすことができる。副島は「菜食主義運動は70年代に入って新たなエコロジー運動として再生する」<sup>84</sup>と述べ、ライツマンも「現在ヴェジタリアンとして生きる人々の多くは1970年代のドイツで発生した環境保護運動、エコロジー運動に参加していた」<sup>85</sup>と主張している。

また、平子によれば「環境保護という思想は、自然保護としてよりはむしろ、労働環境の保護の事柄として史上に出てきた。[中略]こうした流れと社会(労働)革新運動の流れの合流点から、今日の『緑の人々』が出てきている」という。<sup>86</sup>すなわち、もともと存在していた環境保護の思想が19世紀末に生改革運動という形になって表れたのだ。

1970年代のエコロジー運動のきっかけとして、1968年が一つの契機とされている。1968年は世界的にもベトナムのテト攻勢やポンド・ドル危機、五月革命など重大事件が起こった年であり、学生運動や社会運動がピークに差し掛かった年である。小野はこの年の画期性についてこう述べている。

ひとつは、冷戦体制の解体を促進する決定的転機になったことであり、もうひとつは、過去の歴史が累積した自由、平等、平和を基軸とする人間解放にとっての障害に対する挑戦を一挙に爆発させ、現代の世界が解決すべき多くの問題点を赤裸々にしたことである。<sup>87</sup>

当時西ドイツをはじめとした西ヨーロッパ諸国では政治的な革新意識が高まっており、世代間の対立が露わになった。一方は戦後の復興に尽力し、経済成長を優先させナチスの罪に目を瞑ってきた世代であり、もう一方はそれに異議を唱える若い世代である。この若い世代が議会外反体制運動(APO)を盛り上げ、政権や大学

の体質を批判した。この APO はのちに衰退するが、APO に参加していた世代の多くはその後反原発運動や平和運動に参加し、更には緑の党に加わっていった。<sup>88</sup>

こうした中、経済成長至上主義によって犠牲にされていた環境問題、平和問題の改善を政策に盛り込んだヴィリー・ブラント(Willy Brandt, 1913-92)が率いる社  
5 民党が 69 年の選挙に勝ち、ブラント政権が誕生した。ブラントは東方政策や環境政策に力を入れていたが、これは人権を尊重する意識によるものであった。<sup>89</sup>

ブラントの人権重視は、それまでドイツ人がナチによって人権侵害をしてきたことへの強い反省を基本にしている。ドイツが過去に犯した罪を念頭にしての政治  
10 である。ブラント政権の環境政策も、人権政治(人間に危険を及ぼす物質を防ぐ政治)の一環として解釈することができる。<sup>90</sup>

彼がこのように環境政策に力を入れていたのは、国外における環境問題に対する意識が盛り上がったことも影響している。1970 年は欧州評議会によって「欧州自然  
15 保護年」に指定され、72 年にはストックホルムで国連人間環境会議が開催された。また、アメリカにおいても 70 年の「アース・デイ」には約 2000 万人の人々が参加した。<sup>91</sup> こうして、1971 年にはドイツにおける環境問題の社会的認知が非常に高まることとなった。世論調査機関 Infas の調査によれば、環境保護という用語を知っているものの数が 1970 年 9 月時点で 41%だったのに対し、1971 年 11 月には 92%にまで上昇した。<sup>92</sup>

ブラント政権は 74 年 5 月に終わりを迎えた。その後のシュミット政権では環境政策が後退しており、82 年に酸性雨による「森の死」が報告された後も、総選挙で敗れたことで環境政策を実行できずに終わった。

1980 年代ではこの「森の死」をきっかけに、エコロジー活動や環境問題に対する  
25 議論が沸き起こった。「緑の党」がヨーロッパ全体において成功した。ユークターはこう述べている。「この時期には、環境意識は、環境問題に積極的な人々だけがもつものではなく、ついには誰もが心を動かさずにはいられない生活感情の一部になった」。また、ユークターはドイツにおける高い環境意識の展開が特殊なものであると主張している。彼によれば、その原因は「生命感情と政治意識が一つになった」  
30 ことであるという。また、「広く社会にエコロジーの風潮が浸透した」ことによって、「明らかに非暴力の考え方が社会の中で優勢」となった。<sup>93</sup>

こうした意識は、平子によれば環境教育によるものであった。

環境教育は今日のドイツを環境先進国にしている最大の原動力なのである。森の死やチェルノブイリ事故を知り、環境問題が地球規模の問題であることがはっきりしてきたとき、すでに十数年の環境教育を受けてきたドイツの青少年は、環境危機に対して断固明確な反応を示した。<sup>94</sup>

環境教育に力を入れていたのもブランドであった。基礎学校から基本科目として環境教育が取り入れられ、子どものうちから生活に密着した環境、社会のシステムを自ら考えさせる授業が学習指導要領に定められた。また、自治体や環境団体の主導のもと、学校外でも環境教育が行われた。「ブント」(BUND: Bund für Umwelt und Naturschutz Deutschland=ドイツ環境・自然保護連盟)やグリーンピース、ドイツ自然保護連盟のような、大小百ほどの環境団体が市民に情報提供を行ったり自然保護の意識を呼びかける活動を行っていた。現在でもこうした団体は存続しており、政治に対する働きかけもなされている。<sup>95</sup>

このような世代から、政治団体「緑の党」(緑の人々、Die Grünen)は結成された。ユークターによれば、これは「新しい社会運動と反原子力の抗議運動が密接に結びついたもの」である。<sup>96</sup> 「新しい社会運動」は従来の労働運動とは違い、脱物質主義的で分散的、自治的なものである。そのテーマはエコロジー分野や女性運動、平和運動であり、1980年代において急速な発展を遂げているとユークターは述べている。<sup>97</sup> しかし、ユークターの述べる通り、この「新しい社会運動」の定義が「労働運動とは異なり、物質主義的ではなく、脱物質主義的な問題を優先的に扱う」もので、「さらに社会的に多様な人々を取り込む運動の典型である」ならば、これまでに見てきた生改革運動の形態もまた、この定義に当てはまる。<sup>98</sup> そのためこの「新しい社会運動」には生改革運動も含めることができると考えられる。よって、緑の党の結成には生改革運動以来の環境意識と原子力という技術への新たな危機感が結びつき生まれたものと言えるのではないか。

そしてこの緑の党はドイツのみならず、世界各国に伝播した。自然環境破壊を人権侵害ととらえる彼らは他国のエコロジー政党支持者にとってのロールモデルとして機能した。<sup>99</sup>

### 第三章 現代におけるヴェジタリアニズム

前章では生改革運動以降にドイツのヴェジタリアニズムがどのような変遷を辿ったのかを見てきた。本章では現在ドイツで流行しているヴェジタリアニズムの実態を明らかにし、19世紀のヴェジタリアニズムとの比較を行うことで、当時の運動とどのような共通点があるかを探っていく。

#### 第一節 現在のヴェジタリアニズムの流行

実際に現在ヴェジタリアニズムがどの程度流行しているのかを見ていきたい。まずはドイツのヴェジタリアンに関するいくつかの基礎的な情報を以下に示していく。

10 VEBUによれば、現在ドイツにおけるヴェジタリアン人口は約800万人であると想定されている。2006年は国民の約8%、約662万人がヴェジタリアンであったことから、ドイツのヴェジタリアン人口の推移は比較的安定した、緩やかな増加傾向にあると言える。<sup>100</sup> 一方ヴィーガンに関しては様相が違っている。市場調査機関であるSKOPOSの2016年の調査によれば、その中でもヴィーガンは約130万人であり、

15 国民の約1.6%にあたる。<sup>101</sup> 2008年にはドイツのヴィーガン人口が約8万人であったことを考えると、この10年弱の間に約16倍にも増加している。2016年、2008年の調査はそれぞれ調査機関が異なっているが、その点を差し引いたとしてもドイツのヴィーガン人口は飛躍的に増えたと言える。また、厳密にはヴェジタリアンとは言えないものの、意識的に野菜中心の食生活を送る人々であるフレキシタリアンはドイツ

20 人口の約13%を占めている。<sup>102</sup>

「ロバート・コッホ研究所」(das Robert Koch Institut)の調査によれば、年齢別のヴェジタリアンの割合のうち、最も割合が高い年代が18歳から29歳と60歳から69歳の年代であった。<sup>103</sup> また性別を考慮すると、ヴェジタリアンの男女比は3:7となり、女性のヴェジタリアン人口の方が多い。<sup>104</sup> さらにヴィーガンにおいてはこの

25 傾向は顕著で、Skoposの調査によればその男女比は1:8にまで偏る。

また地域差についてもAcxiomの調査結果が出ている。ヴェジタリアンは人口50万人以上の都市に多く存在している。また、旧西ドイツ地区の方がヴェジタリアン人口が比較的高いと言える。<sup>105</sup> また、Techniker Krankenkasse社の調査によれば、バーデン・ヴュルテンベルク州やバイエルン州といった南ドイツの方がフレキシタリア

30 アンの分布が高いという結果が出ている。<sup>106</sup>

さらに、ヴェジタリアンやヴィーガンのニーズに沿った市場も拡大している。例えばヴィーガンの人々は革製品やウールを用いた日用品なども使うことができない。その

ような人々のためにヴィーガン用品専門店が都市に店舗を構えており、ネットショッピングによってもそういった日用品を買うことができる。<sup>107</sup>

5 ヴェジタリアンやヴィーガンに向けた食品の生産量も増加しており、2010年には2億800万ユーロであったドイツ全体の売り上げ量が2015年には4億5400万ユーロと、倍以上に増加している。これまで非ヴェジタリアン向けの商品を取り扱っていた企業がヴェジタリアン食の開発に乗り出し、それに成功した例がある。例えばRügenwalder Mühleという食品企業はドイツでは有名なヴルストのブランドであるが、2015年における総売上額2億500万ユーロのうち、20%はヴェジタリアン向けの食品の売上高が占めている。<sup>108</sup>

10 次にドイツ国内のメディアがどの程度ヴェジタリアニズムについて取り上げたかを見ていきたい。本稿ではSPIEGEL紙、ZEIT紙、STERN紙のオンラインサイトで、特定の単語を含む記事検索を行なった。そしてここでは„Vegetarianismus“、  
15 „Vegetarier“、„Veganismus“、„Veganer“という単語をそれぞれ検索した。38、39ページの表1.1-1.4ではそれぞれの単語の掲載記事数を1947年から2017年12月31日に至るまで、5年ごとに示している。

どの雑誌においても„Vegetarismus“や„Vegetarier“という単語が掲載された記事は1947年以来一定数存在していた。1996年以降には記事数が増加傾向を示しており、特に2011年から2015年にかけての5年間で大きな伸びを見せている。

20 一方で„Veganismus“や„Veganer“という単語は2000年代に入るまではほとんど存在していなかった。もっとも、„Vegan“という単語自体が1944年にできた比較的新しい言葉であるということを考慮しなくてはならない。<sup>109</sup>しかしこの二つの単語もまた先ほどと同様に2011年以降には記事の中によく見られるようになった。SPIEGEL紙やStern紙においては同じ年代の„Vegetarier“の掲載記事数をゆ  
25 うに上回っている。

この結果から、メディアで盛んにヴェジタリアンに関連する記事が見られるようになったのは2000年以降と言って良いだろう。そして近年ではヴェジタリアニズムを超えて、ヴィーガニズムが流行の兆しを見せていると考えられる。

30 以上で示したように、現在ドイツには多くのヴェジタリアンが生活しており、その需要が経済効果としても現れている。ドイツのヴェジタリアン人口は今後も更に増加する傾向が予想されている。

## 第二節 ヴェジタリアンであることの目的

ここではヴェジタリアンとして生きる選択をした人々の動機を見ていきたい。19世紀末には文化頹落の危機感や人格が文明化した社会に埋没することに対する危機感から生改革運動に発展した。その中でヴェジタリアン運動を支持する人々もまた、自然と一体になることで自身に関わる問題のみならず、こうした社会の問題を解決しようとする目的があった。21世紀現在におけるヴェジタリアンたちはどういった理由からそういった生き方を選んだのかに注目する。

この動機については当然さまざまなものがあり、しかも一貫したものではない場合がある。例えば、ヴェジタリアンになると決めた時点では動物愛護を支持していたが、のちに環境保護の観点からヴェジタリアニズムを実践するようになるといった場合である。しかし、ライツマンが1996年に行ったアンケート調査によれば、主に二つの動機が多く見られた。倫理的、哲学的な理由が最も多く、次に健康に関する理由が多い。<sup>110</sup> 本論文 40、41 ページの表で示す通り倫理的、哲学的な理由の中には「飢餓問題の解決への貢献としての肉食の拒否」なども含まれている。ヴェジタリアンへの転身の動機は、ライツマンによれば大きく4つに分けることができるという。倫理的、哲学的な理由、宗教、信仰上の理由、健康に関する理由、そして経済、社会、生態学的な理由である。

倫理的、哲学的な理由は、宗教、信仰上の理由とともに最も古くから存在する動機であり、どちらも輪廻転生の観念から生まれたものである。これは古代ギリシャ哲学、さらに古代インド哲学における魂の不死と再生の教えに由来するものである。すなわち、「次に自分が何に生まれるかわからない。自分の前世の身内が動物として転生したかも知れない。それを殺すことは正しいことではない。」という考えから、動物を殺すことは悪だという認識が生まれる。さらに、ヨーロッパに古代インドの宗教思想が伝えられて以降は仏教やヒンドゥー教由来の不殺生や肉食忌避の観念が根付いていた。シュトゥルーフエが彼の小説『マンダラの彷徨』の中でインド哲学に基づいたヴェジタリアニズムの正当性を説いたことも、彼がルソーの『エミール』だけでなく東洋の思想に影響を受けたことを示している。<sup>111</sup> 時代が降り、動物が苦痛を感じるのかという問題を提起した哲学者が現れた。ジェレミー・ベンタム(哲学者、イングランド、1748-1832)のこの問いをもとに、ピーター・シンガー(哲学者、オーストラリア、1946-)は平等主義を動物にまで拡大させ、種族差別という言葉を作った。人種差別と同様に、動物を大量飼育したり、彼らに苦痛を与えることを差別として位置付けたのだ。歴史上の多くの著名人たちが、この倫理的、哲学的理由によってヴェジタリ

アン的な生き方を選択した。今日においては、動物の権利や動物の殺害の正当性を問う声がメディアによって拡散されやすくなった。そういった影響から、ヴェジタリアンになった動機として倫理的、哲学的理由を挙げる人々が多いのではないかと考えられる。

- 5 宗教、信仰上の理由からヴェジタリアン的な生活を送る場合、どの宗教の聖典においても多かれ少なかれ動物を殺すべきでないという指示が含まれているにもかかわらず、宗教によってヴェジタリアニズムの様相は異なっている。ヒンドゥー教においてはヴェジタリアニズムが徹底されており、神の使いとされる牛はインド国内に溢れかえっているほどである。<sup>112</sup> 仏教においても殺生、肉食は禁じられている。日本は仏教が
- 10 伝来するまでは肉を食べていたものの、奈良時代に仏教が定着して以降は殺生と肉食を避けるようになった。民衆レベルにおいて、実際には狩猟や肉食が行われていたが、社会的な通念として殺生、肉食は禁忌とされた。<sup>113</sup> 日本においてはさらに神道の「穢れ」観がここに加わり、殺生に対する罪悪感をさらに高めることとなった。
- 15 <sup>114</sup> イスラム教においても「食べて良いもの」と「そうではないもの」が厳格に区別されており、聖典であるコーランの中にもその記述がある。<sup>115</sup> イスラム教徒はこの「ハラール(許されたもの)」と「ハラーム(禁忌)」を実生活においても意識して食事を行なっている。一方でキリスト教においては宗教としてそういったタブー視されている食品はほとんどない。レビ記には陸海空の動物に渡って複雑な食料規定がされているものの、「蹄が完全に割れ、反芻する動物」を意識して摂取している人は多くないだろう。
- 20 <sup>116</sup> その定義によれば、兎や豚も禁忌として分類される。そのため、カトリック、プロテスタント、東方正教会といった教派によって禁忌とされる食物に違いはあるものの、キリスト教は宗教による食料の忌避が比較的少ないと言える。ライツマンによれば、ヴェジタリアンであるキリスト教徒にとって重要なのはモーセの十戒の一つである「あなたは殺してはならない」というものと、創世記にある、神に許可された食物についての記述であるという。もっとも、第 5 の戒に含まれる「殺す」の原語であるラーハツ(ラーツァー)
- 25 は人間の私的殺害を意味する言葉であり、動物を殺す際にこの言葉は用いられない。<sup>117</sup>

- また、創世記 1 章 29 には「種をつけるすべての草と種をつける果実のなるすべての木とをあなたがたに与えた。それはあなたがたの食物となろう。」との記述があり、確
- 30 かにここでは人類は肉を食べて良いとは言われていない。<sup>118</sup> しかし、同じく創世記の 9 章すなわちノアの洪水の後では「生きてうごめくものはすべてあなたがたの食物となろう」と発言し、さらに「ただし、肉はいのちあるまま、すなわち血のまま、食べてはな

らない」と述べており、ここでは肉食が肯定されていることに注意しなくてはならない。

119 聖書の記述に揺らぎがある以上、聖書の内容から自身の生き方を選ぼうとすれば恣意的な判断にならざるを得ない。それゆえ、聖書の文言はヴェジタリアンとして生きる人にとっての第一の理由ではなく、後付けの根拠もしくは副次的な理由となっているのではないかと考えられる。

5 健康を気遣ってヴェジタリアン食を選択する人々もまた多い。特にヨーロッパにおいては 2000 年代初頭の狂牛病問題をきっかけに、牛肉需要が低下すると同時にヴェジタリアンへ転向する人も急増した。ドイツにおいては 2001 年の段階で 660 万人に達し、<sup>120</sup> 当時 8200 万人の人口に占める割合は約 8.0%であった。<sup>121</sup> それ  
10 以来現在に至るまでドイツにおけるヴェジタリアン人口は増加傾向にある。<sup>122</sup> 実際、ヴェジタリアン食は肥満や痛風といった疾患のリスクを抑えるのに有効な食餌療法である。しかし当然ビタミン B12 など肉や魚に由来する栄養素も存在しているため、ヴェジタリアン食を健康的な食事と見なすことができるのは、そういった栄養素をサプリメントなどの肉、魚に由来する食品以外のものから補うことができる場合に限られる。  
15 <sup>123</sup> 特に動物が関わっている全ての食品を拒絶するヴィーガンの人々は、医師の指示無しにそのような食事を続けることが栄養失調に繋がり得るという指摘がされている。もちろん植物性食品である砂糖の過食は肥満や糖尿病のリスクに影響を及ぼす。ヴェジタリアン食は常に健康食とイコールというわけではないが、健康志向の人々にとっては理想的な食事形態であるようだ。

20 経済、社会、生態学的な理由からヴェジタリアンとして生活している人々は視点の中心を自分に据えるのではなく、自らの食生活が社会へ及ぼす影響にも視点を向けていると言える。例えば動物の大量飼育によって、動物たちの排泄物が土壌汚染の原因となる場合がある。また肉を 1kg 欲する場合、動物を飼育するために必要な穀物の量はその 5 倍から 7 倍であるとされる。<sup>124</sup>

25 ライツマンは以下のように計算している。

世界中の人々の大部分が穀物から直接栄養を摂取している(発展途上国では一人当たり 1 年に 160kg)。一方 EU では生産された穀物の 60%、アメリカでは 70%が動物の餌になっている。この穀物は肉の形で消費されるので、すなわちヨーロッパ人は理論上 1 年で 435kg、アメリカ人は 660kg の穀物を消費していることになる。<sup>125</sup>



さらにカロリー転化率の観点からも、肉を食べることは非常に効率が悪いと言える。牛肉のカロリー転化率は 6.8%であり、鶏肉、豚肉、羊肉、牛肉の平均をとったとしても 12.4%に過ぎない。<sup>126</sup>

5 全世界の人間が肉を食べなくなれば、世界の食糧問題は容易に解決できると言われている。また、飼料用の穀物を育てるために大量の耕地が必要であり、毎秒サッカーコート 1 面分の面積の熱帯雨林が失われている。ライツマンによれば、第二次世界大戦以降のドイツにおいて個人の肉の消費量が増えたことによる主な生態学の問題として、以下の 5 つが挙げられている。

- 耕地の消費
- 10 • 農薬と堆肥による地下水の汚染
- メタンやアンモニアによる温室効果の促進
- 肥育促進剤や獣医学薬物の残留
- 生物多様性の喪失<sup>127</sup>

15 グローバル化が進むことで、南北の格差や地球規模の環境問題が露見するようになった。こうした事情を鑑み、「社会のために」「環境を守るために」という意識が原動力となって自身の行動を改めることにつながったという人々が存在している。

このように、人は様々な理由からベジタリアンとして生きることを選択する。

### 第三節 現代と 19 世紀末の思想比較

20 本節ではこれまで取り上げてきた時代のベジタリアニズムの思想をまとめ、生改革運動内部のベジタリアニズムと現代のベジタリアニズムの共通点を探っていく。まずは表面的な相違点、共通点を洗い出し、そのうえで当時と現在の環境との関連で比較を行っていき、思想的に繋がっている部分を明らかにしていく。

25 その前に、生改革運動から現在に至るまでの流れをまとめておきたい。生改革運動におけるベジタリアニズムは根本の発想として「自然賛美」や「自然回帰」といったロマン主義の流れを引き継いでいる。近代化や都市化を批判し、自然と共に生きることが社会問題を解決する方法であるとして、当時の代替宗教的なものとして認識されていた。そして、当初は規制を強いるキリスト教会当局への反発、離反からバルツァーなどの提唱者たちに先導された運動であったため、プロテスタントが主流  
30 であった北ドイツで活発な活動が見られた。やがてベジタリアン協会は支持者を募るために宗教的な色を潜め始めたが、多様な生改革運動の台頭によって弱体化した。ナチス時代には協会の掲げていた平和主義的な思想のために弾圧を受けた。

一方で生改革運動時代から存在していた民族主義的な面がヒトラーによって支持されており、この時代にはヴェジタリアニズムの二面性が見られた。

戦後にはナチス時代の反省から、人権尊重に根ざした政策が打ち出されるようになった。ドイツにおいては、それは環境保護という形で現れた。しかしこれはナチスの時代に発達した動物保護、自然保護の理念に基づいたものであるということに注意しなくてはならない。1970年代の国民的な環境意識の高まりによって緑の党が誕生し、これをドイツが世界に広めることとなった。この頃から生改革運動に対する従来の評価が見直され始め、エコロジーの観点からもはやされるようになり、「生改革運動がドイツのエコロジー運動の先駆けである」とする声までもが上がった。

10      そして現在、2000年代以降またしてもヴェジタリアニズムが世間に広く注目されることとなった。現在ではさらにヴィーガニズムに対する注目も高まっており、これは「より厳格なヴェジタリアニズム」に「ヴィーガニズム」という名が付けられて以来初めてのことである。ドイツのヴェジタリアン人口は近年 8-9%を維持しているが、数としては年々増加している。

15      続いて、生改革運動時代のヴェジタリアニズムと現代のそれとの相違点を見ていきたい。まずはヴェジタリアニズムの支持者たちの年代である。生改革運動時代は25-30歳という年代が最も多かった。一方現代においても10-20代の若い層に支持者が多いことは共通しているものの、60歳以上の高齢層の支持者が多いことが相違点として挙げられる。また、ヴェジタリアン運動や協会の活動が活発な地域も、  
20      現在は北ドイツではなく南ドイツに偏っている。そして、ヴェジタリアニズムを実践する環境も全く違うであろう。当時は協会における活動はコロニー内部での生活実践が主で、人々から奇異の目に晒されることもしばしばであった。現代ではそうした生き方が市民権を獲得し、ヴェジタリアンとして生活を送るのに必要な物資も容易に入手できるようになった。今やヴェジタリアンとして生きることは当時ほどの困難を要さな  
25      くなったと言える。

次に当時のヴェジタリアニズムと現代のものとの共通点を見ていきたい。まず何よりヴェジタリアニズムを実践する目的として、個人の倫理的な意識からのみでなく社会問題の解決というより大規模な目標を設定している点が挙げられる。19世紀における社会問題とは文明病や道徳的な堕落、浪費といったものであった。19世紀のヴェ  
30      ジタリアンは利便性と引き換えに変わっていった環境や、人々の道徳心に対して危機感を抱いた。生改革運動において自然に即した生活を行なうことで近代の産業社会によって毒された心身の不調を回復しようとした。そしてそのような生活を世に

広めることが近代化に伴う社会問題そのものを解決できると信じていた。一方現代において目指すべき課題とは、70 億人まで膨らんだ人類全体が自然と共生し、平和に暮らすための持続可能な社会を作ることである。現代のヴェジタリアンは環境問題、食糧問題や南北問題の解決のために肉を断念し、動物を搾取しない生活を送ることで貢献しようとしている。

5 5  
10 10  
15 15  
20 20  
25 25  
30 30

とはいえ 19 世紀の「社会問題」は近代化に伴う諸問題であり、現代ではもはやヴェジタリアニズムによってのみ解決できる問題であるとは見なされていない。当時の社会問題は道德の墮落や文明病といったものであったが、今日ヴェジタリアンたちが解決を目指す環境問題などはグローバル化に伴い目立つようになった地球規模のものが多。当時と現代では思想によって解決できるとされている問題の種類が変わったのだ。しかし、19 世紀と現代の両方のヴェジタリアンがヴェジタリアニズムの実践によってその時代に問題となっている事柄の解決を目指しており、その姿勢は共通していると思われる。

15 15  
20 20  
25 25  
30 30

二つ目の共通点として、協会 (Verein) の組織や制度が発達しているドイツにおいて、ヴェジタリアン運動が協会の外においても広く実践されている生活様式である点を挙げることができる。19 世紀においてはパーレジウスの述べる通り、ヴェジタリアンではない人々から「生改革の変人」のように見なされることを避けるヴェジタリアンも存在しており、協会に属し本格的な生活実践を行わない人々もいた。<sup>128</sup> また、ヴェジタリアン協会に属していない生改革支持者たちが他の運動を並行して支持している場合もあり、例えば土地改革運動協会に属しながらヴェジタリアニズムを実践していたという人々もいた。一方現代においてもヴェジタリアン協会に属していないヴェジタリアンが多く存在している。ライツマンによれば、ヴェジタリアンたちの中には「彼らにとって魅力的でない協会に加入する心算はなく、確立した構造の外における社会的な関与を好む」人々が存在するためであるという。<sup>129</sup> 彼の主張を言葉通りに受け取るならば、協会のシステムや協会の掲げる目的そのものに不満を持つ人々が、協会に属していないと考えられる。また、個人によって情報が簡単に入手できるようになったために協会に属する必要性が薄くなったことも原因として考えられる。

このように、彼らが協会に属さない理由は様々であるが、いずれにせよヴェジタリアニズムはヴェジタリアン協会の外においても多く実践されている思想であると言える。

20 世紀には生改革運動が下火になり、協会での活動がほとんど休止に追い込まれたが、このような協会の外での生活実践によってヴェジタリアニズムやそれに関

連したエコロジー思想が復活し、現代での再びの流行につながる一因となったのではないかと考えられる。

5 データから導き出される相違点、共通点は以上のようなものであった。次に、19世紀に問題となっていた「文化」と「文明」という対立の視点からヴェジタリアニズムの流行をどのように解釈できるか考えたい。

伊東によれば、人類は今文化と文明のあり方を見直すべき時代に突入しているという。彼の主張の概要をまとめると、次のようになる。

10 人類はこれまで 5 段階の革命を経験してきた。人類革命(人類の誕生)、農業革命(農業の発見)、都市革命(都市の形成)、精神革命(哲学、宗教の発達)そして科学革命(近代科学の成立)である。人類は現在、第 6 段階すなわち環境革命に移行しようとしている。環境革命とは従来の近代科学や倫理規範の転換であり、持続可能な社会を実現するための段階である。同時に、科学革命のために偏りすぎた物質的価値と精神的価値の比重を適正なバランスに戻す  
15 段階だ。<sup>130</sup>

科学革命によって利便性ははるかに向上した。物質的な満足感はあるが従来よりはなくなった。しかし、それによって科学革命以前に重視されていた精神的文化の価値が軽んじられるようになった。これは先のディルタイの引用箇所である「前世紀における哲学の最高の業績である意識と認識の分析が、この上もなく効果的に、この粉砕の作業に協力してきた」という部分が示している通りである。そこで、今人類にとって必要なことは文化と文明のどちらかを蔑ろにすることなく、精神的にも物質的にも充実した生活を送るということになる。

25 ヴェジタリアニズムの流行はこの第 6 段階においてはむしろ自然な動きと見える。環境問題や食糧問題を意識することはこの段階の価値基準に沿っているためだ。これは 1970 年代のエコロジー運動における人々の環境意識の高さに関しても同様であろう。そして、動物の権利や南北問題などの不平等について考えることは動物への同情や隣人愛といった精神的な活動であるとも言える。こうした意味ではヴェジタリアニズムは文化的活動といえることができるだろう。

30 このような点を踏まえると、第 5 段階を迎えたばかりの 19 世紀末における生改革運動すなわち科学革命への反発は、第 6 段階の先取りと言うことはできないだろうか。環境革命が行き過ぎた科学技術への反省であり、物質文明の発展と引き換え

に失った精神的な価値に再び着目するものであるならば、生改革運動もまた同じである。19世紀に自然と一体となることで文化の価値を取り戻そうとした生改革運動は当時、ドイツの民衆のごく一部でのみ行われているものだった。それが21世紀になり、自然に即した生活やヴェジタリアニズムは広く受け入れられるようになった。

5 このように文明に対して文化の価値の重要性を強調しているという点で、生改革運動時代のヴェジタリアニズムは現代のヴェジタリアニズムの流行と思想的なつながりを持っているものとして認識できる。

最後に、生改革運動のきっかけともなった文明批判の2つの要因について考えたい。すなわち、19世紀における工業化、都市化への反発と合理化や科学化への反発という2つの不満である。前者は「文明病」や墮落の原因であるとされ、後者は個人

10 個人の人格の喪失に対する危機感を煽ったものであった。これらは現代社会にも通じるものがあるのだろうか。

一つ目に関しては既に本章第二節で述べた通り、文明病とされる病を生活習慣の改善によって予防しようという動きはますます大きくなっている。身体的な病に対する

15 対症療法だけでなく、生活習慣の見直しが重要視されていることは言うまでもない。また、工業化による環境破壊や都市化による人口の集中などは現代でも依然として問題視され続けており、世界各国の経済や状況が把握しやすくなったことも相まって、より身近に感じやすくなった問題と言える。二つ目の合理化や科学化に対する反発という不満に関しては、個人の人格の喪失への危機感は19世紀末ほど深刻

20 な問題ではないと考えられる。科学化がさらに進んだことによって個人はより尊重され、力を持たない人々も声を上げやすくなった。民主主義が導入され、人々の無力感、喪失感は再び回復されつつあるのではないだろうか。むしろ、今日において科学化が問題とされるのであれば、軍事兵器の発達や遺伝子操作などであろう。民衆レベルであれば、食物に関して過度に科学技術を用いることに懐疑的になる人々も多い。

25 ヴェジタリアンでなくてもビオマルクト<sup>131</sup> を利用する人々が多いことがそれを示している。

このように、19世紀の人々が不信感を抱いた2つの要因が現代においても顕著である状況では、ドイツにおいて生改革の思想を根底に持つヴェジタリアニズムやヴィーガニズムが今日再び注目されているのはむしろ自然である。

30 生改革運動が起こった背景には近代文明の発達という、人々の価値観や生き方の転換を要求する大きな出来事があった。当時の人々は、科学の発展と環境保全

との板挟みの状況にあり、生き方の見直しを迫られている 21 世紀の我々と重なっている。

ドイツにおいて発生した生改革運動という前例は、歴史の中でも人々の意識の中でも重要な意味を持つものであり続けると考えられる。<sup>132</sup>

5

## おわりに

本論では時代ごとのヴェジタリアニズムの形を追うことで、19 世紀のドイツ生改革運動が現在ドイツで流行しているヴェジタリアニズムにどのように影響を与えているかについて考察した。その結果として、19 世紀の人々に抱かれていた不安感や社会への不信感が現代にも通じており、それに対する反応としてヴェジタリアニズムを支持する動きが起こることは当然であるという結論に至った。

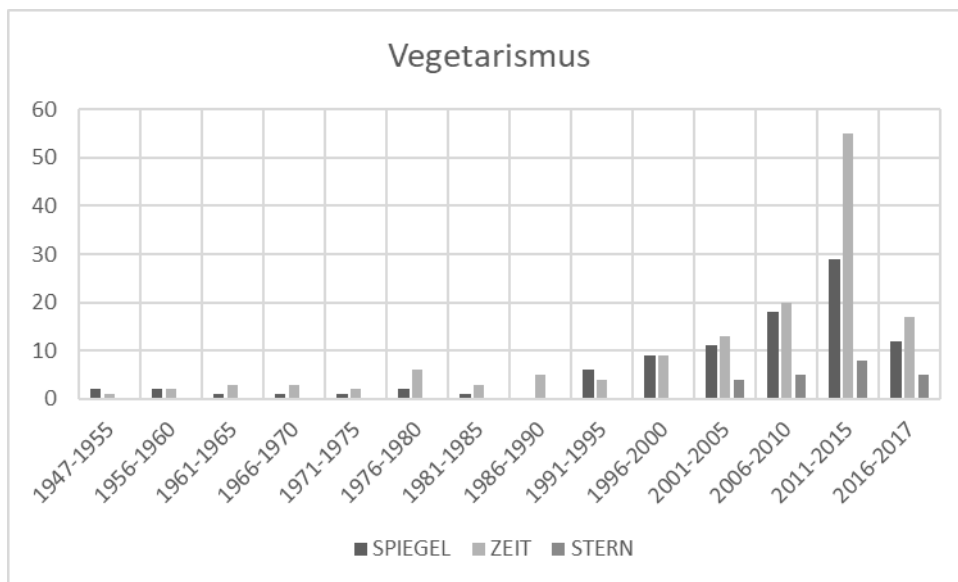
しかし、本論で触れることができたのはドイツ語圏内の運動のみである。「生改革運動」という名がついていなくとも、各国で似た運動が展開されていたであろうことは想像に難くない。それにもかかわらず、ヨーロッパにおける国ごとのヴェジタリアン人口にはばらつきがある。これにはどのようなことが起因しているのか、各国の歴史的、宗教的な背景を調査し、これを明らかにすることが今後の課題として挙げられる。

卒業論文を執筆するにあたって歴史的な観点からヴェジタリアニズムについて調べを進めていくうちに、それぞれの時代の運動が一本の糸で繋がっているような印象を受けた。近代化によって生改革運動が起こったこと、ナチス時代にその民族主義的な面が利用されたこと、1970 年代にその反省からエコロジー運動に発展したこと、そして現在のヴェジタリアニズムが流行していること。これらを改めて眺めてみると、それぞれが後の時代に重要な影響を与え、今日のヴェジタリアン文化が出来上がっているのだという実感を得ることができた。

25

図 1-4

図 1 „Vegetarismus“掲載記事数



5

図 2 „Vegetarier“掲載記事数

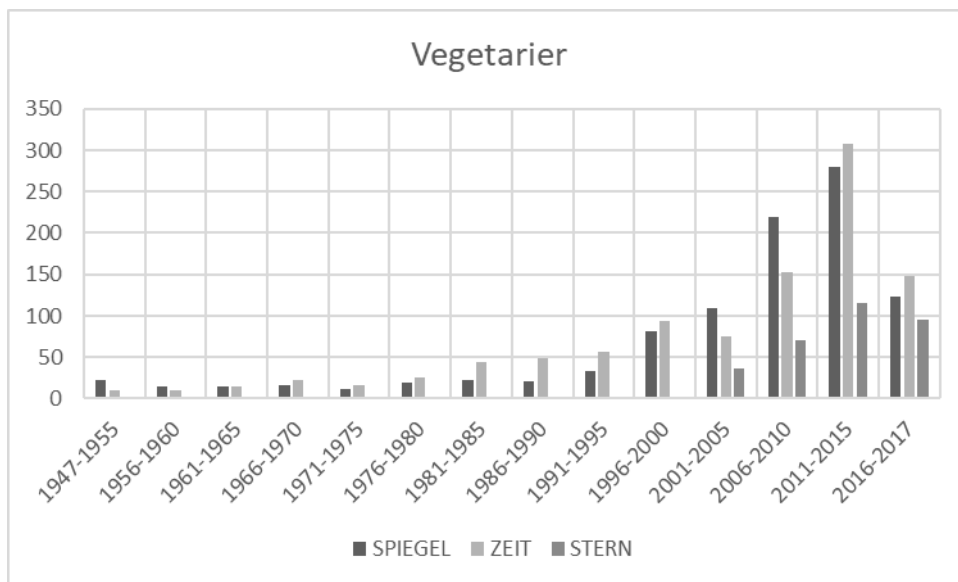


図 3 „Veganismus“掲載記事数

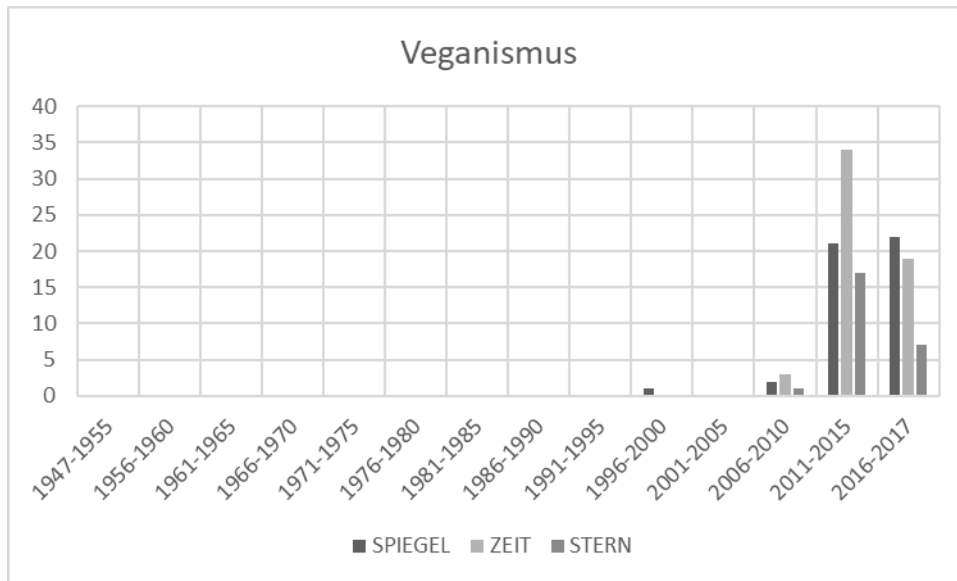
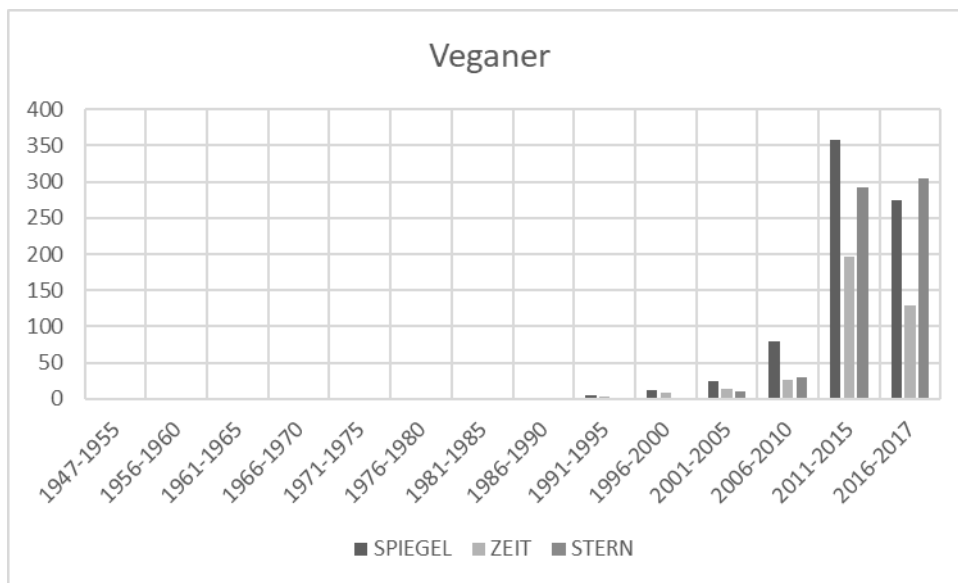


図 4 „Veganer“掲載記事数



5



表 ヴェジタリアン食を選ぶ理由<sup>133</sup>

倫理的、宗教的	不正や罪としての殺害 肉の消費が宗教的なタブーであるため 動物の生存権 動物への同情 動物の大量飼育の拒否 世界の非暴力への貢献としての動物の殺害の拒否 飢餓問題の解決への貢献としての肉食の拒否
美学的	死んだ動物を見ることの嫌悪 肉の嫌悪 ヴェジタリアン食を調理する楽しみ
スピリチュアル	精神力の解放 瞑想やヨガの助け 性欲の回避
社会的	教育 習慣 所属するグループの影響
健康的	全体的な健康の維持(未分化) 減量 特定の病気の予防 特定の病気の治療 身体的なパフォーマンスの向上 精神的な能率の向上
コスメティック	減量 シミの除去
衛生学的、毒性学的	ヴェジタリアンのキッチンにおける衛生の改善 汚染物質の受容の回避
経済的	限られた財政上の可能性のため 食料としての他の可能性のための節約
社会的 <sup>134</sup>	飢餓問題の解決への貢献としての肉食の拒否

生態的	動物の大量飼育を通じた環境汚染の回避
-----	--------------------

## 注

- 1 例えば副島美由紀は「ドイツ産業革命以降の生活改革運動とその文化的影響に関する総合的研究」の中で、ヴァイマル時代のドイツ文化に生改革運動期の諸運動が影響していることを指摘している。また、竹中亨は同氏の論文「急進民族主義と改良運動：帝政ドイツにおける知識人と近代」において生改革運動の思想と民族主義思想比較を行い、両者に共通点を見出している(副島美由紀 他「ドイツ産業革命以降の生活改革運動とその文化的影響に関する総合的研究」『平成11年度～平成13年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書』2002; 竹中亨「急進民族主義と改良運動：帝政ドイツにおける知識人と近代化」『待兼山論号叢(史学)』29 1995年、1-23 ページ)。
- 2 竹中亨『帰依する世紀末 ドイツ近代の原理主義者群像』ミネルヴァ書房 2004年、243 ページ。
- 3 生松敬三ほか編『概念と歴史がわかる西洋哲学小辞典』筑摩書房 2011年、466 ページ。
- 4 ヴィルヘルム・ディルタイ『生の哲学』H. ノール編、久野昭監訳、以文社 1987年、60-61 ページ。
- 5 宮田眞治、畠山寛、濱中春編著『世界文化シリーズ4ドイツ文化 55のキーワード』ミネルヴァ書房 2015年、214 ページ。
- 6 生松敬三ほか、前掲書、467-468 ページ。
- 7 竹中、前掲注 2、14-15 ページ。
- 8 伊東俊太郎『伊東俊太郎著作集 第7巻』麗澤大学出版会 2008年、20-21 ページ。
- 9 竹中、前掲注 2、15 ページ。
- 10 同、7-10 ページ。
- 11 同、229 ページ。
- 12 上山安敏『神話と科学』岩波書店 2001年、25 ページ。
- 13 竹中、前掲注 1、7 ページ。
- 14 同、4-5 ページ。
- 15 フレデリック・C. バイザー『啓蒙・革命・ロマン主義：近代ドイツ政治思想の起源 1790-1800年』杉田孝夫訳 法政大学出版局 2010年、453-454 ページ。
- 16 同、457-458 ページ。
- 17 ノヴァーリス「キリスト教世界またはヨーロッパ」『ドイツ＝ロマン派集』筑摩書房 1963年、191-201 ページ、192 ページ。
- 18 フリードリヒ・シュレーゲル、アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル『シュレーゲル兄弟』平野嘉彦ほか訳、国書刊行会、1990年、9-134 ページ、46 ページ。
- 19 同、49 ページ。
- 20 竹中、前掲注 1、11-13 ページ。
- 21 竹中、前掲注 2、212 ページ。
- 22 南直人「一九／二〇世紀転換期ドイツにおける食改革運動と身体イメージ(女性歴史文化研究所第25回シンポジウム報告「近代ヨーロッパ社会における身体表現と身体ケアー食とファッションを中心にー」. II)」『女性歴史文化研究所紀要』25 2017年、29-40 ページ、33-34 ページ。
- 23 1893年、オラニエンブルクに設立されたコロニー。エデンにおいては果樹、野菜栽培が行われ、生改革運動の支持者たちが共同生活を行っていた。その中では菜食や禁酒が実践されていた。ワンダーフォーゲル団体や合唱団なども存在してお

- り、自然に即しており、かつ文化的な生き方を実践するための共同体であった(竹中、前掲注 2、163-165 ページ)。
- <sup>24</sup> Claus Leitzmann: *Vegetarismus. Grundlagen, Vorteile, Risiken*. München 2009. S. 10.
- <sup>25</sup> 南、前掲論文、38 ページ。
- <sup>26</sup> Leitzmann, a.a.O. S. 30.
- <sup>27</sup> Hans-Jürgen Teuteberg: *Zur Sozialgeschichte des Vegetarismus*. In: *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 81. Bd., H. 1. Stuttgart 1994, S. 33-65. S. 37.
- <sup>28</sup> Leitzmann, a.a.O. S. 31-32.
- <sup>29</sup> Leitzmann, ebd. S. 32.
- <sup>30</sup> Teuteberg, a.a.O. S. 40.
- <sup>31</sup> Leitzmann, a.a.O. S. 11-12.
- <sup>32</sup> 竹中、前掲注 2、206 ページ。
- <sup>33</sup> 同上、207 ページ。
- <sup>34</sup> 同上、203 ページ。
- <sup>35</sup> 同上、207 ページ。
- <sup>36</sup> 同上、210 ページ。
- <sup>37</sup> Eva Barlösius: *Naturgemäße Lebensführung. Zur Geschichte der Lebensreform um die Jahrhundertwende*. Frankfurt a. M. 1997. S. 197.
- <sup>38</sup> Barlösius, ebd. S. 217.
- <sup>39</sup> Barlösius, ebd. S. 200.
- <sup>40</sup> 竹中、前掲注 2、217 ページ。
- <sup>41</sup> Barlösius, a.a.O. S. 223.
- <sup>42</sup> Florentine Fritzen: *Gesünder leben. Die Lebensreformbewegung im 20. Jahrhundert*. Frankfurt a. M. 2006. S. 172.
- <sup>43</sup> Fritzen, ebd. S. 172-173.
- <sup>44</sup> Barlösius, a.a.O. S. 196.
- <sup>45</sup> Barlösius, ebd. S. 196.
- <sup>46</sup> Barlösius, ebd. S. 202-203.
- <sup>47</sup> Barlösius, ebd. S. 196-197.
- <sup>48</sup> Barlösius, ebd. S. 209-210.
- <sup>49</sup> Barlösius, ebd. S. 35-82; Matthew Jeffries: *Lebensreform: A Middle-Class Antidote to Wilhelminism?* In: Geoff Eley / James Retallack (ed.): *Wilhelminism and Its Legacies: German Modernities, Imperialism, and the Meanings of Reform, 1890-1930*. New York 2003. pp. 93-106.
- <sup>50</sup> Jeffries, ebd. pp. 93-94.
- <sup>51</sup> 自由宗教運動は 1840 年代に始まった教義の合理化を掲げる自由主義的な宗教運動である。当時敬虔主義を推し進め、各教区の自律性の制限を強いていた教会を批判するものであった。この運動は後に女性解放運動や教育改革運動とも連携し、ザクセンやテューリンゲン地方に広まった(小原淳「ナッハメルツの革命家群像」『ゲシヒテ』7 ドイツ現代史研究会 2014 年、3-17 ページ、9 ページ)。
- <sup>52</sup> Barlösius, a.a.O. S. 45.
- <sup>53</sup> 小原、前掲論文、9-10 ページ。
- <sup>54</sup> ルソーは『エミール』第 2 篇の中で子供が肉よりもケーキや果物を好んでいるという理由から肉食が人間にとって不自然なものであると述べた上でプルタルコス「肉食は許されるか」から引用を行っており、「この文章は私の主題に無関係だとはい

- え、私はこれを書き写す誘惑に抵抗できなかった。」と続けている(ジャン=ジャック・ルソー『エミール 上』樋口謹一訳 白水社 1986年、214-218 ページ)。
- 55 小原、前掲論文、7-9 ページ。
- 56 Barlösius, a.a.O. S. 63.
- 57 リヒャルト・ヴァーグナー『ワーグナー パルジファル』高辻知義訳 音楽之友社 2013年、32 ページ。
- 58 鶴田静『ベジタリアンの世界—肉食を超えた人々』人文書院 1997年、168 ページ。
- 59 リヒャルト・ヴァーグナー『ワーグナー著作集 5』三光長治監修 高辻知義ほか訳 第三文明社 1998年、191-268 ページ。
- 60 同、237 ページ。
- 61 同、241 ページ。
- 62 同、226 ページ。
- 63 鶴田、前掲書、178-179 ページ。
- 64 アルトゥール・ショーペンハウアー『ショーペンハウアー全集 9』前田敬作ほか訳 白水社 1973年、364-365 ページ。
- 65 小原、前掲論文、7 ページ。
- 66 マズダズナン運動とは 1900 年ごろにドイツに持ち込まれた、元はアメリカで起こった運動である。マズダズナン運動は人間の身体と意識的な呼吸法を起点としており、禁酒やヴェジタリアン食、断食などが行われていた。これは身体的な健康効果よりも、自己実現や自己認識など精神的な効果を期待されていた (Teuteberg, a.a.O. S. 50)。
- 67 Teuteberg, a.a.O. S. 50.
- 68 Teuteberg, ebd. S. 50.
- 69 ロバート・N・プロクター『健康帝国ナチス』宮崎尊訳 草思社 2003年、162 ページ。
- 70 同、164 ページ。
- 71 同、164 ページ。
- 72 同、158 ページ。
- 73 ボリア・サックス『ナチスと動物—ペット・スケープゴート・ホロコースト』関口篤訳 青士社 2002年、49 ページ。
- 74 プロクター、前掲書、153 ページ。
- 75 同、145 ページ。
- 76 同、156 ページ、[]内は筆者。
- 77 Leitzmann, a.a.O. S. 36.
- 78 Geschichte von Pro Veg (ehemals VEBU)  
<https://vebu.de/vebu/organisation/geschichte-des-vebu/> (2017/10/26 確認)
- 79 竹中、前掲注 1、9 ページ。
- 80 Jeffrey Kaplan: *Savitri Devi and the National Socialist Religion of Nature*. In: *Pomegranate The International Journal of Pagan Studies*. Sheffield 2012. pp. 4-12 pp. 3.
- 81 プロクター、前掲書、160 ページ。
- 82 Janet Barkas: *The Vegetable Passion: A History of the Vegetarian State of Mind*. London 1975. pp. 130.
- 83 Teuteberg, a.a.O. S. 51.
- 84 副島美由紀 他「ドイツ産業革命以降の生活改革運動とその文化的影響に関する総合的研究」『平成 11 年度～平成 13 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書』2002年、7 ページ。

- 85 Leitzmann, a.a.O. S. 3.
- 86 平子義雄『環境先進的 社会とは何か—ドイツの環境思想と環境政策を事例に』世界思想社 2002 年、4 ページ。
- 87 小野一『緑の党—運動・思想・政党の歴史』講談社 2014 年、57 ページ。
- 88 西田慎『ドイツ・エコロジー政党の誕生—「六八年運動」から緑の党へ』昭和堂 2009 年、68 ページ。
- 89 平子、前掲書、145 ページ。
- 90 同、147 ページ。
- 91 フランク・ユークター『ドイツ環境史—エコロジー時代への途上で』服部伸ほか訳 昭和堂 2014 年、51-52 ページ。
- 92 Kai F. Hünemörder: *1972- Epochenschwelle der Umweltgeschichte?* In: Franz-Josef Brüggemeiner und Jens Ivo Engels (Hrsg): *Natur- und Umweltschutz nach 1945. Konzept, Konflikte und Kompetenzen.* Frankfurt a. M. 2004. S.139.
- 93 ユークター、前掲書、55-56 ページ。
- 94 平子、前掲書、177 ページ。
- 95 同、175-176 ページ。
- 96 ユークター、前掲書、123 ページ。
- 97 同、122 ページ。
- 98 同、122 ページ。
- 99 同、124 ページ。
- 100 Leitzmann, a.a.O. S. 38.
- 101 Skopos: “1,3 Millionen Deutsche leben vegan”  
<https://www.skopos.de/news/13-millionen-deutsche-leben-vegan.html>  
(2017/11/15 確認)
- 102 Katja Wohlers: *Iss was, Deutschland. TK-Studie zur Ernährung 2017.* Detmold 2017. S. 10.
- 103 Gert B.M. Mensink: *Journal of Health Monitoring 2016 1(2)* Berlin 2016. S. 2.
- 104 Konrad Altmann: *Vegetarismus in Deutschland. Vegetarismusstudie der Universität Jena und Buchvorstellung von Karen Duves "Anständig Essen"* Norderstedt 2015. S. 4.
- 105 axiom-VEGETARIER: weiblich, urban, markeninteressiert  
<http://www.axiom.de/vegetarier-weiblich-urban-markeninteressiert/>  
(2017/11/15 確認)
- 106 Katja Wohlers, a.a.O. S. 15.
- 107 Barbara Supp: *Im Rausch des Verzichts.* Im: *DER SPIEGEL 35/2016* Hamburg 2016. S.42-46 S. 43.
- 108 Susanne Amann, Ann-Kathrin Nezik: „Die Mehrheit will Bulette“ Im *DER SPIEGEL 36/2016* Hamburg 2016. S. 58-60 hier vor allem S. 60.
- 109 ProVeg: Geschichte von ProVeg (ehemals VEBU)  
<https://vebu.de/vebu/organisation/geschichte-des-vebu/> (2017/11/15 確認)
- 110 Leitzmann, a.a.O. S. 16-17.
- 111 Teuteberg, a.a.O. S. 45.
- 112 山内昶『「食」の歴史人類学—比較文化論の地平』人文書院 1994 年、294 ページ。
- 113 「殺生自体は悪であるものの、行為者は信仰心によって救われる」といった法華経の宣伝がされていたことが影響していると考えられる。

- 114 原田信男「中世における殺生観の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』61 1995年、41-54 ページ、42 ページ。
- 115 山内、前掲書、296-297 ページ。
- 116 松田伊作ほか編『旧約聖書Ⅱ 出エジプト記 レビ記』木幡藤子、山我哲雄訳 岩波書店 2000年、273-279 ページ。
- 117 同、93-94 ページ; 雨宮慧ほか『新共同訳旧約聖書注解Ⅰ』日本基督教団出版局 1996年、157 ページ。
- 118 松田伊作ほか編『旧約聖書Ⅰ 創世記』月本昭男訳 岩波書店 1997年、5 ページ。
- 119 同、26 ページ。
- 120 フレッド・グタール、ウィリアム・アンダーヒル『ニューズウィーク日本版』16-9 2001年、42-45 ページ、44 ページ。
- 121 ドイツ連邦統計局  
[https://www.destatis.de/EN/FactsFigures/SocietyState/Population/CurrentPopulation/Tables/\\_lrbev01.html](https://www.destatis.de/EN/FactsFigures/SocietyState/Population/CurrentPopulation/Tables/_lrbev01.html) (2017/11/15 確認)
- 122 ProVeg: Anzahl der Veganer und Vegetarier in Deutschland  
<https://vebu.de/veggie-fakten/entwicklung-in-zahlen/anzahl-veganer-und-vegetarier-in-deutschland/> (2017/11/15 確認)
- 123 鈴木英鷹「完全菜食とビタミン B12 欠乏: 完全菜食において海苔はビタミン B12 の供給源として有効である」『大阪ソーシャルサービス研究』4 2003年、19-25 ページ、20 ページ。
- 124 Leitzmann, a.a.O. S. 27.
- 125 Leitzmann, ebd. S. 27.
- 126 山内、前掲書、281 ページ。
- 127 Leitzmann, a.a.O. S. 28.
- 128 Barlösius, a.a.O. S. 222-223.
- 129 Leitzmann, a.a.O. S. 38.
- 130 伊東、前掲書、278-285 ページ。
- 131 有機栽培された野菜や自然食品、雑貨などを取り扱うスーパーマーケット。ドイツ国内においては多くのビオマルクトが存在する(片野優「ヨーロッパ・リポート(13) ドイツビオ食 ドイツで話題のビオ・マルクト」『Earth guardian』7 2005年、36-40 ページ)。
- 132 ただし、19世紀に見られたヴェジタリアニズムの「セク特的な性格」が現代で「カルト」へ変容する可能性は否定できない。裸体主義などの理念がナチスの人種主義に近いものであった点を考えると、現代のドイツにおけるヴェジタリアニズムは生改革運動やその後のドイツがたどった歴史と経験を活かすべきであろう。
- 133 Leitzmann, a.a.O. S. 17.
- 134 原文ママ。引用文献中の表において sozial(社会的理由)は2項目挙げられている。

## 参考文献

日本語文献

阿部美哉『現代宗教の反近代性』 玉川大学出版部 1996年。

雨宮慧ほか『新共同訳旧約聖書注解 I』 日本基督教団出版局 1996年。

- 5 生松敬三ほか編『概念と歴史がわかる西洋哲学小辞典』 筑摩書房 2011年。  
伊東俊太郎『伊東俊太郎著作集 第7巻』 麗澤大学出版会 2008年。  
リヒャルト・ヴァーグナー『ワーグナー パルジファル』 高辻知義訳 音楽之友社  
2013年。  
リヒャルト・ヴァーグナー『ワーグナー著作集 5』 三光長治監修 高辻知義ほか訳  
10 第三文明社 1998年。  
小野一『緑の党—運動・思想・政党の歴史』 講談社 2014年。  
小原淳「ナッハメルツの革命家群像」『ゲシヒテ』 7 ドイツ現代史研究会 2014  
年、3-17 ページ。  
片野優「ヨーロッパ・リポート(13) ドイツビオ食 ドイツで話題のビオ・マルクト」  
15 『Earth guardian』 7 2005年、36-40 ページ。  
上山安敏『神話と科学』 岩波書店 2001年。  
フレッド・グタール、ウィリアム・アンダーヒル『ニューズウィーク日本版』 16-9 2001  
年、42-45 ページ。  
ボリア・サックス『ナチスと動物—ペット・スケープゴート・ホロコースト』 関口篤訳 青  
20 土社 2002年。  
アルトゥール・ショーペンハウアー『ショーペンハウアー全集 9』 白水社 1973年。  
鈴木英鷹「完全菜食とビタミン B12 欠乏 : 完全菜食において海苔はビタミン B12  
の供給源として有効である」『大阪ソーシャルサービス研究』 4 2003年、  
19-25 ページ。  
25 竹中亨『帰依する世紀末—ドイツ近代の原理主義者群像』 ミネルヴァ書房 2004  
年。  
竹中亨「急進民族主義と改良運動: 帝政ドイツにおける知識人と近代化」『待兼  
山論号叢(史学)』 29 1995年、1-23 ページ。  
鶴田静『ベジタリアンの世界—肉食を超えた人々』 人文書院 1997年。  
30 西田慎『ドイツ・エコロジー政党の誕生—「六八年運動」から緑の党へ』 昭和堂  
2009年。



- 原田信男「中世における殺生観の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』 61  
1995年、41-54 ページ。
- H. ノール編『生の哲学』 久野昭監訳 以文社 1987年。
- 5 フレデリック・C. バイザー『啓蒙・革命・ロマン主義：近代ドイツ政治思想の起源  
1790-1800年』 杉田孝夫訳 法政大学出版局 2010年。
- 平子義雄『環境先進的社会とは何か—ドイツの環境思想と環境政策を事例に』  
世界思想社 2002年。
- 副島美由紀ほか「ドイツ産業革命以降の生活改革運動とその文化的影響に關す  
る総合的研究」『平成11年度～平成13年度科学研究費補助金(基盤研  
10 究(C)(2))研究成果報告書』 2002年。
- ロバート・N・プロクター『健康帝国ナチス』 宮崎尊訳 草思社 2003年。
- 松田伊作ほか編『旧約聖書 I 創世記』 月本昭男訳 岩波書店 1997年。
- 松田伊作ほか編『旧約聖書 II 出エジプト記 レビ記』 木幡藤子、山我哲雄訳  
岩波書店 2000年。
- 15 南直人「一九／二〇世紀転換期ドイツにおける食改革運動と身体イメージ(女性  
歴史文化研究所第25回シンポジウム報告「近代ヨーロッパ社会における身  
体表現と身体ケア—食とファッションを中心に—」. II)」『女性歴史文化研  
究所紀要』 25 2017年、29-40 ページ。
- 宮田眞治、畠山寛、濱中春編著『世界文化シリーズ4ドイツ文化 55のキーワード』  
20 ミネルヴァ書房 2015年。
- 山内昶『「食」の歴史人類学—比較文化論の地平』 人文書院 1994年。
- フランク・ユークター『ドイツ環境史—エコロジー時代への途上で』 服部伸ほか訳  
昭和堂 2014年。
- ジャン=ジャック・ルソー『エミール 上』 樋口謹一訳 白水社 1986年。
- 25 外国語文献
- Konrad Altmann: *Vegetarismus in Deutschland. Vegetarismusstudie  
der Universität Jena und Buchvorstellung von Karen Duves  
"Anständig Essen"* Norderstedt 2015.
- 30 Susanne Amann, Ann-Kathrin Nezik: „Die Mehrheit will Bulette“ Im  
*DER SPIEGEL 36/2016* Hamburg 2016. S. 58-60.

Janet Barkas: *The Vegetable Passion: A History of the Vegetarian State of Mind*. London 1975.

Eva Barlösius: *Naturgemäße Lebensführung. Zur Geschichte der Lebensreform um die Jahrhundertwende*. Frankfurt a. M. 1997.

- 5 Kai F. Hünemörder: *1972- Epochenschwelle der Umweltgeschichte?* In: Franz-Josef Brüggemeiner und Jens Ivo Engels (Hg.): *Natur- und Umweltschutz nach 1945. Konzept, Konflikte und Kompetenzen*. Frankfurt a. M. 2004.

- 10 Matthew Jeffries: *Lebensreform: A Middle-Class Antidote to Wilhelminism?* In: Geoff Eley / James Retallack (ed.): *Wilhelminism and Its Legacies: German Modernities, Imperialism, and the Meanings of Reform, 1890-1930*. New York 2003. pp. 91-106.

- Jeffrey Kaplan: *Savitri Devi and the National Socialist Religion of Nature*. In: *Pomegranate The International Journal of Pagan Studies*. Sheffield 2012. pp. 4-12.

15 Claus Leitzmann: *Vegetarismus. Grundlagen, Vorteile, Risiken*. München 2007.

Gert B.M. Mensink: *Journal of Health Monitoring* 2016 1(2) Berlin 2016. S. 2-15.

- 20 Barbara Supp: *Im Rausch des Verzichts*. In: *DER SPIEGEL 35/2016* Hamburg 2016. S. 42-46.

Hans-Jürgen Teuteberg: *Zur Sozialgeschichte des Vegetarismus*. In: *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, 81. Bd., H. 1*. Stuttgart 1994. S. 33-65.

- 25 Katja Wohlers: *Iss was, Deutschland. TK-Studie zur Ernährung 2017*. Detmold 2017.

インターネット文献

axiom-VEGETARIER: weiblich, urban, markeninteressiert

- 30 <http://www.axiom.de/vegetarier-weiblich-urban-markeninteressiert/> (2017/11/15 確認)

ProVeg: Anzahl der Veganer und Vegetarier in Deutschland

<https://vebu.de/veggie-fakten/entwicklung-in-zahlen/anzahl-veganer-und-vegetarier-in-deutschland/> (2017/11/15 確認)

ProVeg: Geschichte von ProVeg (ehemals VEBU)

<https://vebu.de/vebu/organisation/geschichte-des-vebu/>

5 (2017/11/02 確認)

ProVeg: Warum vegan leben? 5 gute Gründe

<https://vebu.de/veggie-fakten/warum-vegan-leben/> (2017/11/02 確認)

Skopos: “1,3 Millionen Deutsche leben vegan”

[https://www.skopos.de/news/13-millionen-deutsche-leben-](https://www.skopos.de/news/13-millionen-deutsche-leben-vegan.html)

10 [vegan.html](https://www.skopos.de/news/13-millionen-deutsche-leben-vegan.html) (2017/11/15 確認)

SPIEGEL ONLINE

<http://www.spiegel.de/> (2017/12/31 確認)

Stern.de

<https://www.stern.de/> (2017/12/31 確認)

15 ZEIT ONLINE

<http://www.zeit.de/index> (2017/12/31 確認)

ドイツ連邦統計局

[https://www.destatis.de/EN/FactsFigures/SocietyState/Population/CurrentPopulation/Tables\\_/lrbev01.html](https://www.destatis.de/EN/FactsFigures/SocietyState/Population/CurrentPopulation/Tables_/lrbev01.html) (2017/11/15 確認)

20